

市内遺跡発掘調査報告書

(平成28年度)

－長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書－

2017. 3

諏訪市教育委員会

例 言

1. 本書は長野県諏訪市の市内遺跡についての平成 28 年度発掘調査報告書である。
2. 調査主体者は諏訪市教育委員会であり、各作業及び本書編集は諏訪市教育委員会事務局が担当した。
3. 現地調査期間は遺跡ごとに記載した。整理作業は平成 28 年 11 月から平成 29 年 3 月まで、諏訪市埋蔵文化財整理室で行った。
4. 発掘作業と整理作業の分担は下記の通りである。
発掘・遺構等実測…児玉利一・増澤道夫・古畑しずゑ・神奴勝正・藤森敏幸
遺物水洗・注記…増澤・古畑 遺物実測・トレース・採拓・写真撮影・本書執筆作成…児玉
5. 各遺跡の調査記録は諏訪市教育委員会で保管している。略称・出土遺物の注記は下記の通りである。
大和遺跡…OWA 3 角道通り遺跡…KAKD 3 金子城跡…KNJ 1 2
温泉寺横遺跡…OSJY 御屋敷遺跡…OY 2 漆垣外遺跡…URG 6
大安寺遺跡…SMD 1 5
6. 発掘調査および報告書作成に際し、下記の方々をはじめ多くの方々にご指導・ご協力を得た。記して感謝申し上げます。
高見俊樹 中島 透 小池裕貴 臨江山温泉寺 温泉寺檀徒会 (敬称略)

凡 例

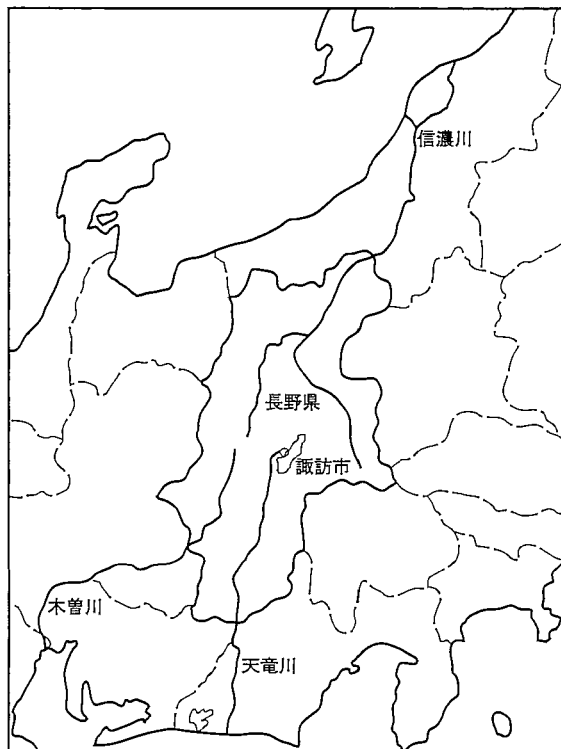
1. 本文中における水糸レベルは可能な限り絶対標高を使用している。
2. 本文中第 1 図は国土地理院 平成 15 年 12 月 1 日発行 1/50,000『諏訪』と、平成 11 年 1 月 1 日発行 1/50,000『高遠』を使用し、加筆した。それ以外は諏訪市役所発行の都市計画基本図を使用している。
3. 遺物番号は実測図版と写真図版で一致する。ただし、写真掲載のみの遺物がある。
4. 写真図版のうち遺物については、土器と石斧の縮尺を約 1/2 に、銭貨・旧石器・小型の石器については縮尺を約 2/3 に統一している。
5. 遺物観察表の法量欄で、() は推定復元値である。

目 次

例言・凡例

目次

I	市内遺跡発掘調査について	1
II	大和遺跡（第3次）	3
III	角道通り遺跡（第3次）	6
IV	金子城跡（第1・2次）	10
V	温泉寺横遺跡（第1次）	13
VI	御屋敷遺跡（第2次）	16
VII	漆垣外遺跡（第6次）	20
VIII	大安寺遺跡（第1・5次）	23
	写真図版	25
	報告書抄録	35
	奥付	



I 市内遺跡発掘調査について

1 今年度の発掘調査

諏訪市内には現在 240 箇所以上の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。これらの包蔵地内における開発行為は例年発生しているが、以前に多かった規模の大きな開発事例は年々少なくなり、近年では個人住宅建設などの小規模なものが主体となっている。諏訪市教育委員会ではこれらの開発行為に迅速に対応するため、国庫補助事業として「市内遺跡発掘調査等事業」を実施し、埋蔵文化財の保護を図っているところである。

本年度の埋蔵文化財包蔵地内での開発行為に伴う発掘届および通知の提出は 17 件あった。件数は昨年と同程度の数である。また、土地開発や売買に関連した事前の有無確認調査の要望もある。これらのうち、8 件について試掘・確認調査を実施し、本書でその内容について報告したい（第 1 図）。ただし、平成 29 年 2 月 27 日から 3 月 6 日に実施した温泉寺横遺跡の第 2 次調査については、本書編集の都合上、収録できなかった。報告は次年度に行うこととする。

・補助事業決定の経過（抄）

平成 28 年 2 月 5 日付け 27 生学文第 110 号

平成 28 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書

平成 28 年 4 月 1 日付け 27 庁財第 612 号（長野県教育委員会指令 28 教文第 1-28 号）

平成 28 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書

2 調査組織

調査組織名 諏訪市教育委員会

調査主体者 小島 雅則（教育長）

事務局 亀割 均（教育次長 10 月 31 日まで）

土田 雅春（教育次長 11 月 18 日から）

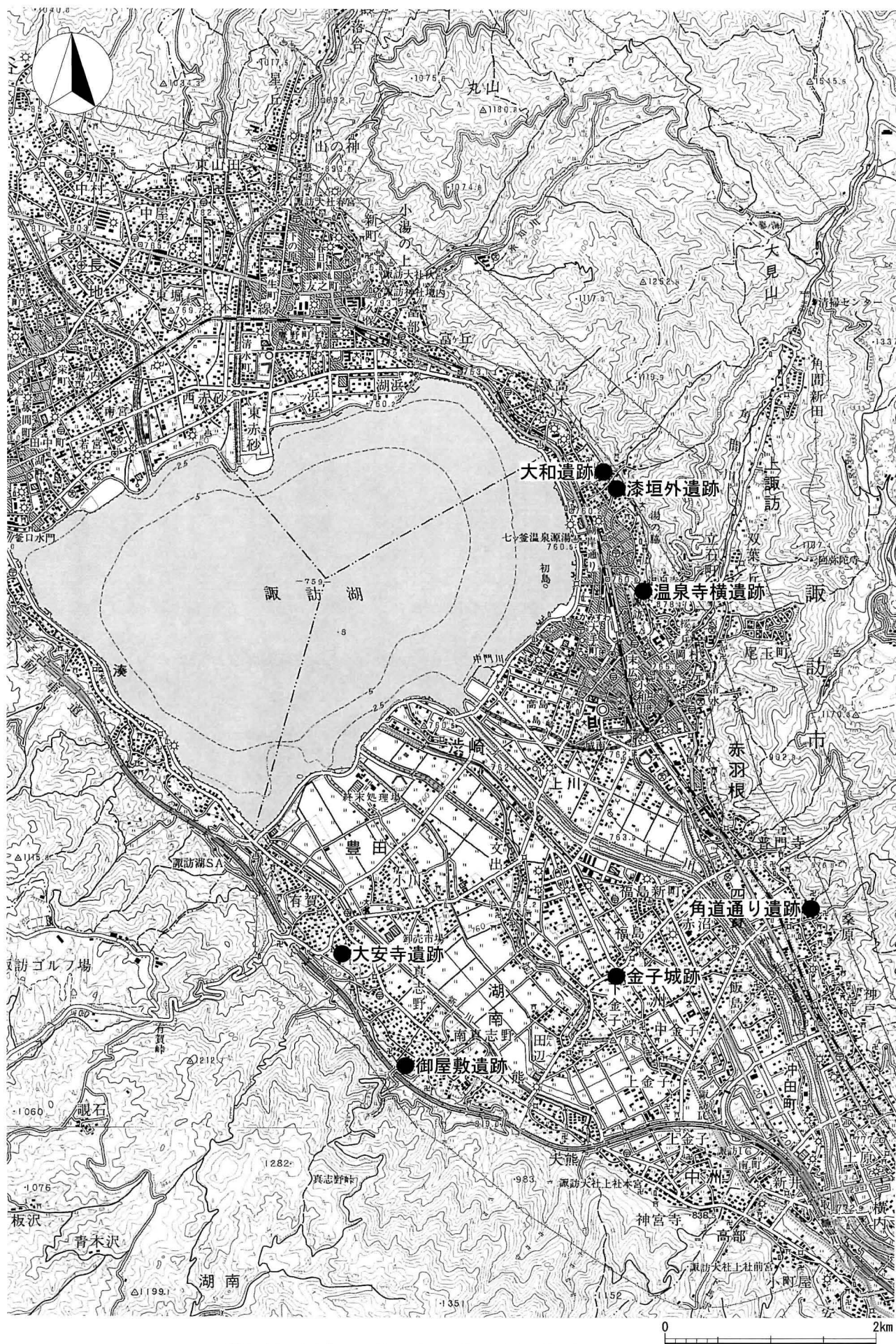
後藤 慎二（生涯学習課 課長）

田中 総（生涯学習課文化財係 係長）

関沢 佳久（生涯学習課文化財係 主査）

兎玉 利一（生涯学習課文化財係 主任 調査担当者）

調査参加者 神奴 勝正・藤森 敏幸・古畑 しずゑ・増澤 道夫



第1図 平成28年度調査遺跡位置図 (S=1/50,000)

Ⅱ 大和遺跡（第3次）

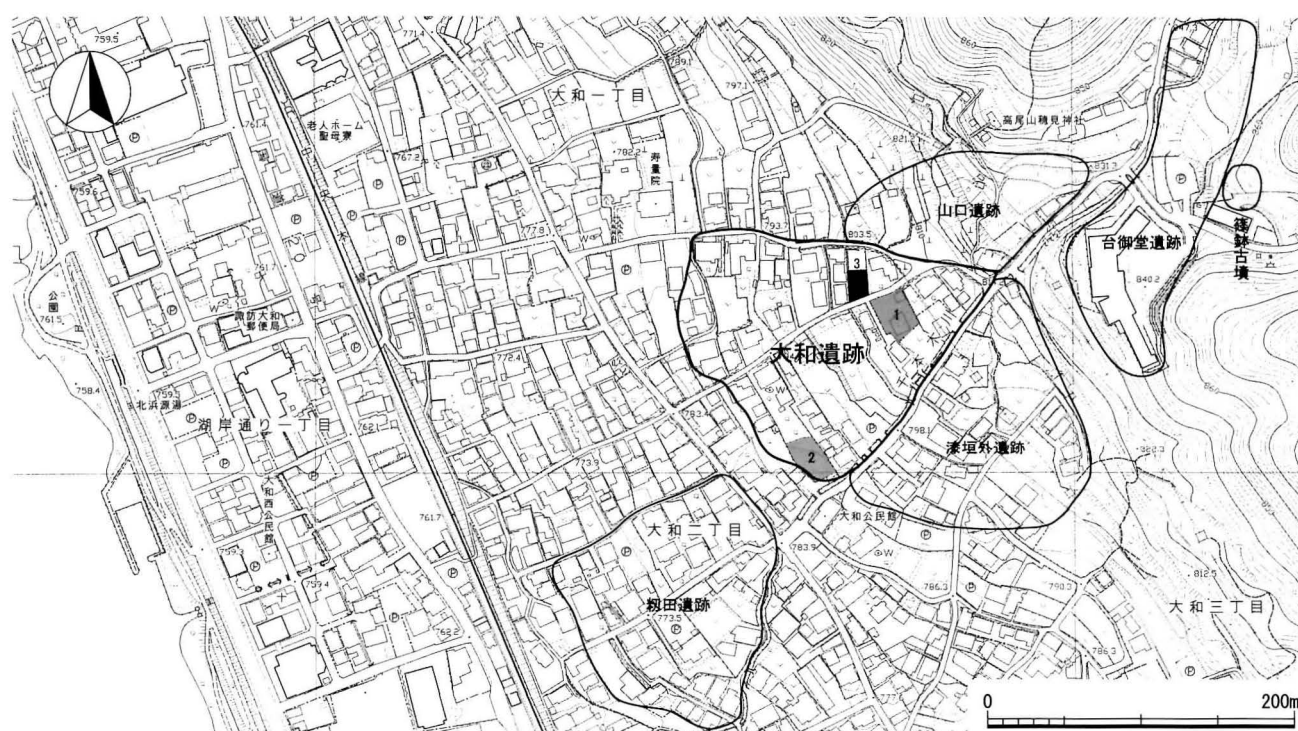
- | | | | |
|---------|---------------------|---------|------------------------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市大和一丁目 11150-2 | 4. 調査目的 | 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 | 平成 28 年 4 月 5 日～6 日 | 5. 検出遺構 | なし |
| 3. 調査面積 | 4 m ² | 6. 出土遺物 | 土器・石器（縄文）・須恵器（古代）
・銭貨（中世） |

7. 遺跡概要及び調査概要

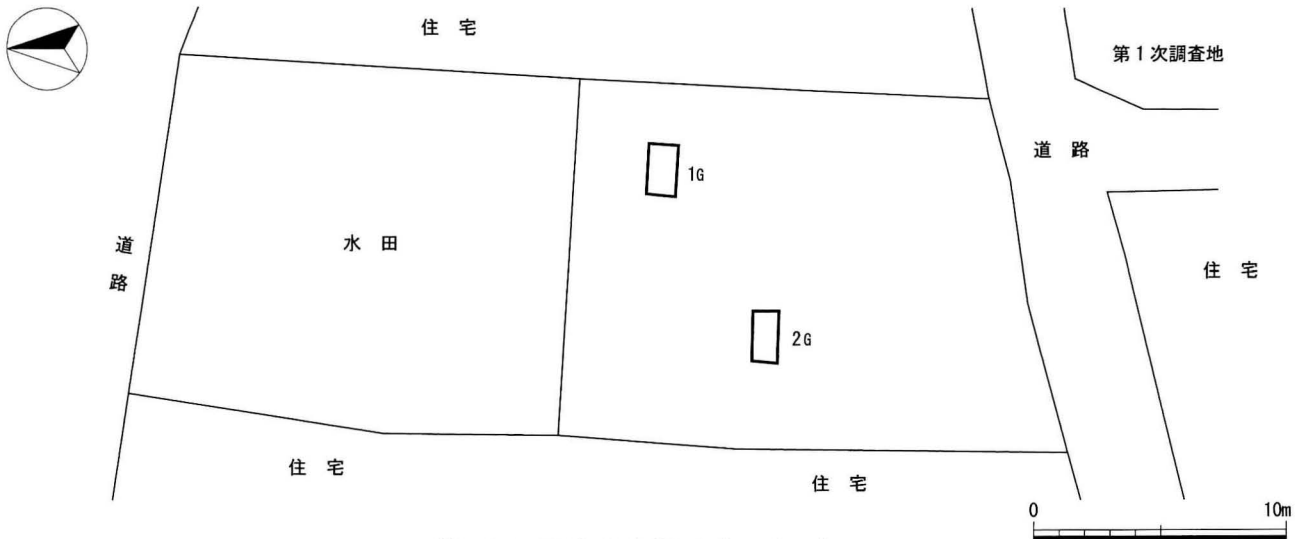
大和遺跡は霧ヶ峰西山麓から連なる大見山山麓を源とする千本木川の扇状地上、諏訪湖東岸の西向き斜面に立地する（第2図）。遺跡の範囲は東西約 200m、南北約 150mで、過去に試掘調査を 2 度実施している。平成 11 年度の調査地は今回調査地の道路を挟んだ南東で、縄文時代中期から後期の遺物が主に出土している（諏訪市教育委員会 2000）。遺跡南端の平成 24 年度調査地では、遺構は捉えられなかったものの縄文時代早期末から前期の遺物が定量出土している（諏訪市教育委員会 2013）。千本木川対岸の漆垣外遺跡や上流の台御堂遺跡では縄文時代と平安時代の遺構・遺物が主に検出されていることから、大和遺跡でもその存在は十分に想定されるところである。

今回、遺跡範囲北の水田地で個人住宅建設があり、事前に試掘調査を実施した。現地は斜面地を切り盛りしてできた小さな平場が広がる。調査地の東西はともに住宅が建っており、1.5mから 2mの高低差がある。建設予定範囲内に東西 2 箇所の試掘坑を設定し、人力により掘り下げを行った（第3図）。

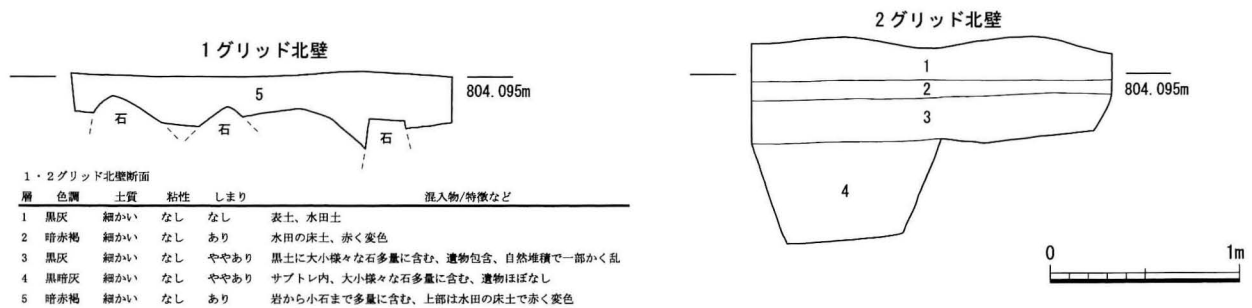
1 グリッドでは水田土直下に地山と推測される多量の石を含んだ暗赤褐色土が検出された（第4図）。山側を切土しているため、旧表土が削平されておりすぐに地山に達したと思われる。2 グリッドは黒色土に人頭大などの石が多量に含まれる堆積が厚く確認された。1 グリッドとは 5mの距離であるが、堆積土が大きく異なる。黒色土は自然堆積と推定され、土器の小片が散漫に含まれた。時代幅があって、



第2図 大和遺跡位置図 (S=1/5,000)



第3図 調査地全体図 (S=1/300)



第4図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

遺構に伴うような様相ではない。地表下 1.1m まで掘り下げたが石を多量に含む黒色土が続いた。工事による掘削範囲に遺構の検出はできなかったので、工事着手には問題ないと判断し、調査を終了した。

遺物は主に縄文時代と奈良・平安時代がみられた(第5図)。出土全体量が少ないが、縄文中期の土器片が目立つ。1 から 8 は中期後葉の曾利式系甕と口縁部を短く内屈させる深鉢がみられる。9 は後期堀之内式の浅鉢口縁。10 は打製石斧で下半が折損している。11 から 13 は須恵器の甕胴部片で、11・12 は同一個体とみられる中型品、13 は器厚が厚いことから大型の甕と推定。いずれも外面は平行叩き成形、内面はナデおよび削りで整形している。黒耀石は小剥片と角の取れた小さい原石が各土層から出土している。石鏃が 1 点出土しており、両脚とも折損している。渡来銭「明道元寶」銅銭が出土。中国北宋時代の明道元年(1032年)が初鑄である。鑄造は明瞭だが劣化し脆弱、重量が軽い。背後の山中には大和城跡があり、その居館や生活空間が扇状地上に存在していた可能性もあろうか。

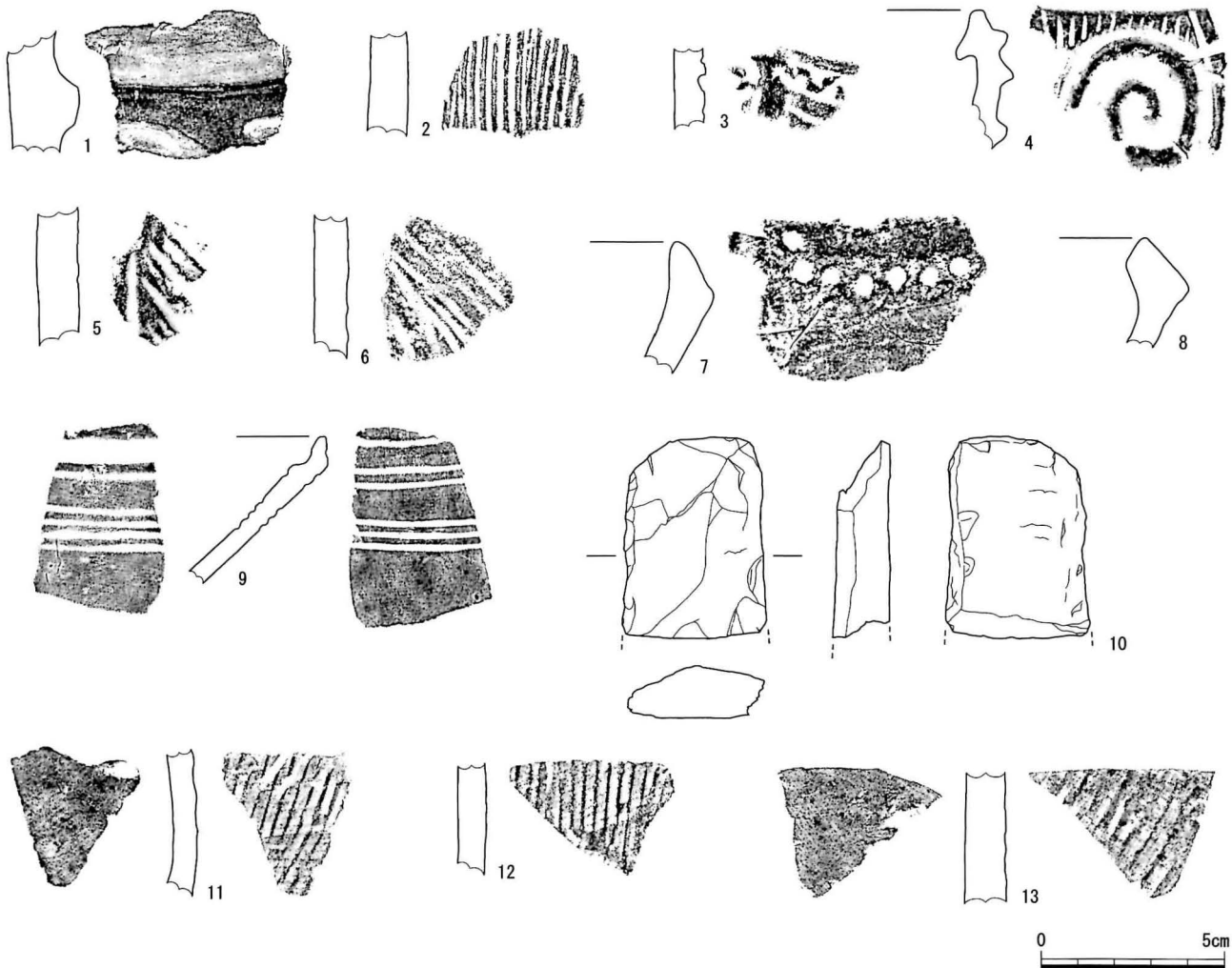
8. 総括

今回の調査では縄文時代中期後葉を中心とした遺物が出土した。明確な遺構はいまだ確認されていないが、扇状地の扇頂部は縄文時代中期から後期の遺物が多い傾向にある。本遺跡の調査例は少ないが、千本木川流域の遺跡群を一体的に考え、さらに詳細を迫っていきたい。

<引用・参考文献>

諏訪市教育委員会 2000『市内遺跡試掘調査報告書 - 平成 11 年度諏訪市内遺跡試掘調査報告書 - 』

諏訪市教育委員会 2013『市内遺跡発掘調査報告書 (平成 24 年度) - 長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書 - 』



第5図 大和遺跡出土遺物 (S=1/2)

第1表 大和遺跡出土遺物観察表

番号	時代	器種	法量(cm)	整形・調整	焼成	残量・色調	胎土・特徴	出土位置
5図1	縄文中期	土器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	内面 ナデ 外面 ナデ、貼付突帯文	良好	少片 内外面 暗赤褐色、内面やや黒色	緻密、砂混和、細かなナデで丁寧に仕上げる、太い貼付突帯文	2G3層
5図2	縄文中期	土器 甕	— — —	内面 ナデ 外面 縦櫛歯状沈線文	良好	小片 内外面 暗褐色	緻密、砂混和、密に垂下櫛歯状沈線文	2G3層
5図3	縄文中期	土器 甕壺	— — —	内面 ナデ？ 外面 貼付・刺突・波状文	良	小片 内外面 褐色～赤褐色	緻密、砂混和、粘土紐貼付けし上下交互に刺突文、結果波状文に見える、もろい	2G3層
5図4	縄文中期	土器 甕	— — —	内外面 ナデ 外面 貼付渦巻・垂下沈線文	良好	口縁小片 内外面 褐色、断面赤褐色	緻密、砂混和、粘土紐貼付けの渦巻文と垂下沈線文、内面はかえしのように突出	2G3層
5図5	縄文中期	土器 甕	— — —	内面 ナデ磨き 外面 ナデ、綾杉文	良好	小片 内外面 暗褐～黒褐色	緻密、砂・雲母含む、内面丁寧にナデる、外面斜方向に沈線文	2G3層
5図6	縄文中期	土器 甕	— — —	内面 摩耗で不明 外面 綾杉文？	やや不良	小片 内外面 褐色～淡褐色	緻密、砂多量混和、斜方向に隆線・沈線文	2G3層
5図7	縄文中期	土器 鉢甕	— — —	内面 ナデ 外面 円形穿孔、円形刺突文	やや不良	口縁小片 内外面 淡褐色	緻密、砂多量混和、くの字に肥厚する口縁、端部に円形孔を開けさらに円形刺突文を列に配す	2G3層
5図8	縄文中期	土器 鉢甕	— — —	内外面 ナデ、外面は丁寧	良	口縁小片 内外面 赤褐色	緻密、砂混和、内側にくの字に屈折し断面方形に面取、文様なし	2G3層
5図9	縄文後期	土器 鉢	— — —	内面 ナデ、沈線 外面 ナデ磨き、沈線	良好	口縁小片 内外面 暗褐～暗灰色	緻密、細かな砂粒含む、両面に沈線、内面口唇に太い凹線、器厚薄い、後期堀之内式	2G3層
5図10	縄文	打製石斧	縦 5.6 幅 4 厚さ 1.5	打ち欠いて成形		1/2残存 緑色	緑色片岩製、下半打折、片面山形に盛り上がる、片面は平ら	2G3層
5図11	古代	須恵器 甕	— — —	内面 ナデ、同心円文当具痕 外面 平行叩き	良好	小片 内外面 暗赤褐色 外面 淡灰色釉	緻密、白色粒少量含む、赤っぽい色調で器厚薄い、内面ナデ整形だがわずかに当具痕が残る、12と同一個体	1G5層
5図12	古代	須恵器 甕	— — —	内面 ナデ 外面 平行叩き	良好	小片 内外面 暗赤褐色 外面 淡灰色釉	緻密、白色粒少量含む、赤っぽい色調で器厚薄い、11と同一個体	1G5層
5図13	古代	須恵器 甕	— — —	内面 削り 外面 平行叩き	良好	小片 内外面 灰色	緻密、白色粒含む、大型甕の胴部	2G2層
図版7-14	縄文	石磯	— — —	内外面 押圧剥離		略完形 灰色～黒色	黒礫石製、灰色に黒色縞状に入る、両脚部破損	2G2層
図版7-15	中世	銭貨	縦 2.5 横 2.5 厚さ 0.11	鋳造	良好	完形 内外面 濃緑～錆褐色	北宋銅銭、明道元年初鋳、方形孔、表面「明道元」、裏面無文、もろい	2G3層

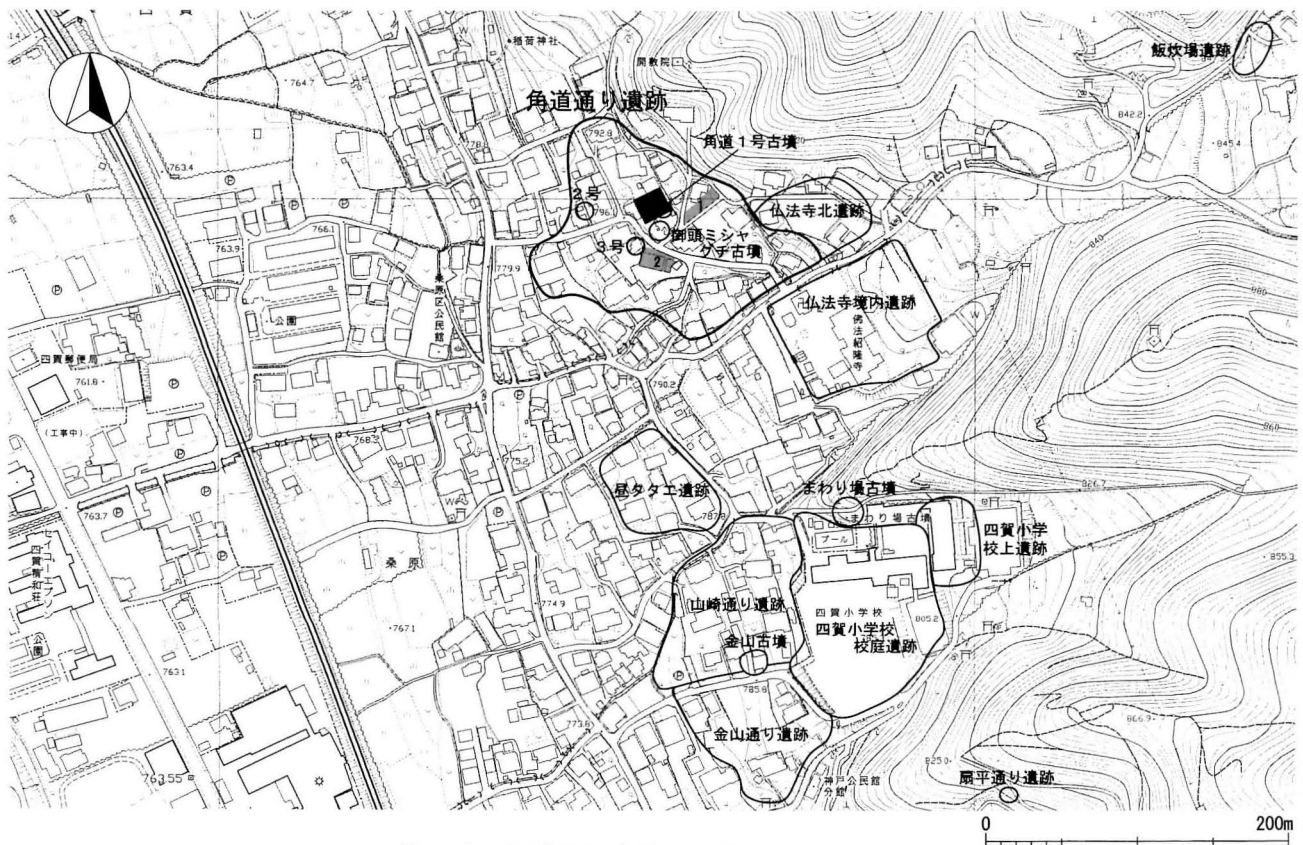
Ⅲ 角道通り遺跡（第3次）

- | | | | |
|---------|----------------------|---------|------------------------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市四賀角道通 4433 番イ他 | 4. 調査目的 | 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 | 平成 28 年 7 月 7 日～ 8 日 | 5. 検出遺構 | なし |
| 3. 調査面積 | 3 m ² | 6. 出土遺物 | 須恵器・土師器（古墳・平安）・石器（弥生）・銭貨（近世） |
7. 遺跡概要及び調査概要

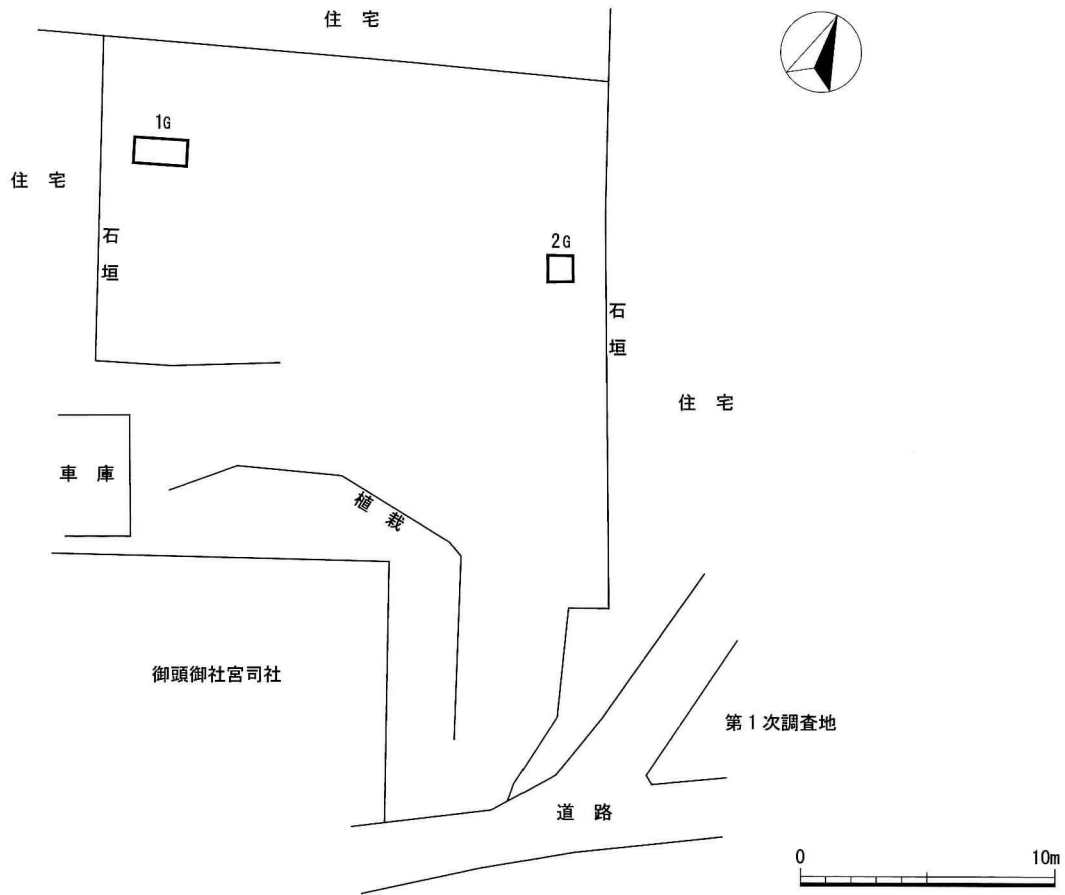
角道通り遺跡は四賀桑原地区、仏法紹隆寺の所在する扇状地にある（第 6 図）。扇状地は立縄・別沢川によるもので、全長が短く傾斜も急である。旧甲州道中あたりの断層崖でさらに西へ落ちこみ、J R 中央本線や国道 20 号線周辺に至ると諏訪湖に起因する低湿地であったと考えられる。上流は仏法寺裏山で一度幅を狭め、その先は幅が広がって北沢と南沢の 2 つの沢に分かれる。沢の合流する一帯には四ツ塚古墳群が築かれ、さらに南沢の谷を入った北斜面には藤塚古墳が築かれた。

本遺跡は縄文時代中期土器や土製円板の採集により包蔵地となっているが、それとは別に遺跡内には御頭ミシャグチ古墳、角道古墳 1～3 号墳も所在した。大正時代以前に削平されており正確な位置は分かっていないが、横穴式石室を有する後期古墳と推定される。平成 10 年度には本調査地の東側、平成 17 年度には南西側の隣接地で試掘調査を行っているが、遺物がわずかに出土した程度で遺構の確認はされていない（諏訪市教育委員会 1999・2006）。

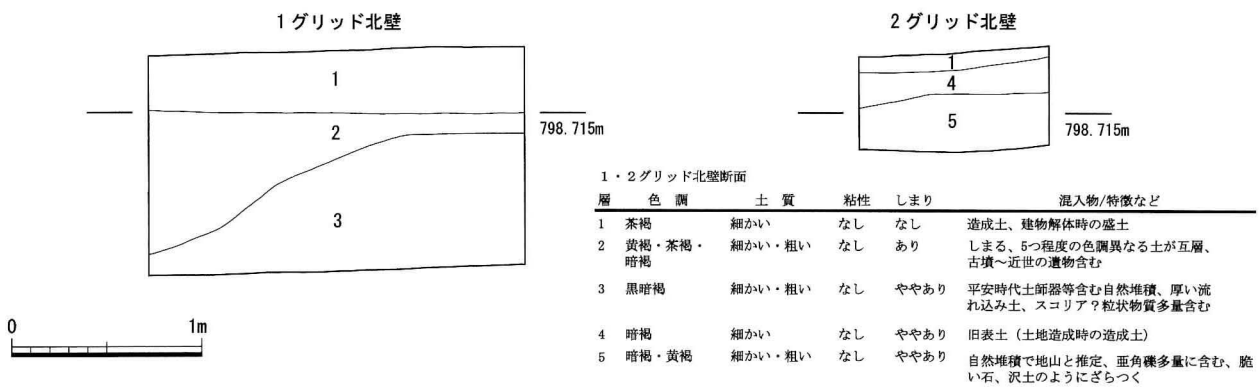
今回、遺跡中央の宅地において個人住宅の建て替え工事が計画されたため、既存建物の解体後に試掘調査を実施した。調査地には明治時代に建てられた主屋と蔵があったが解体・地均しされていた。



第 6 図 角道通り遺跡位置図 (S=1/5,000)



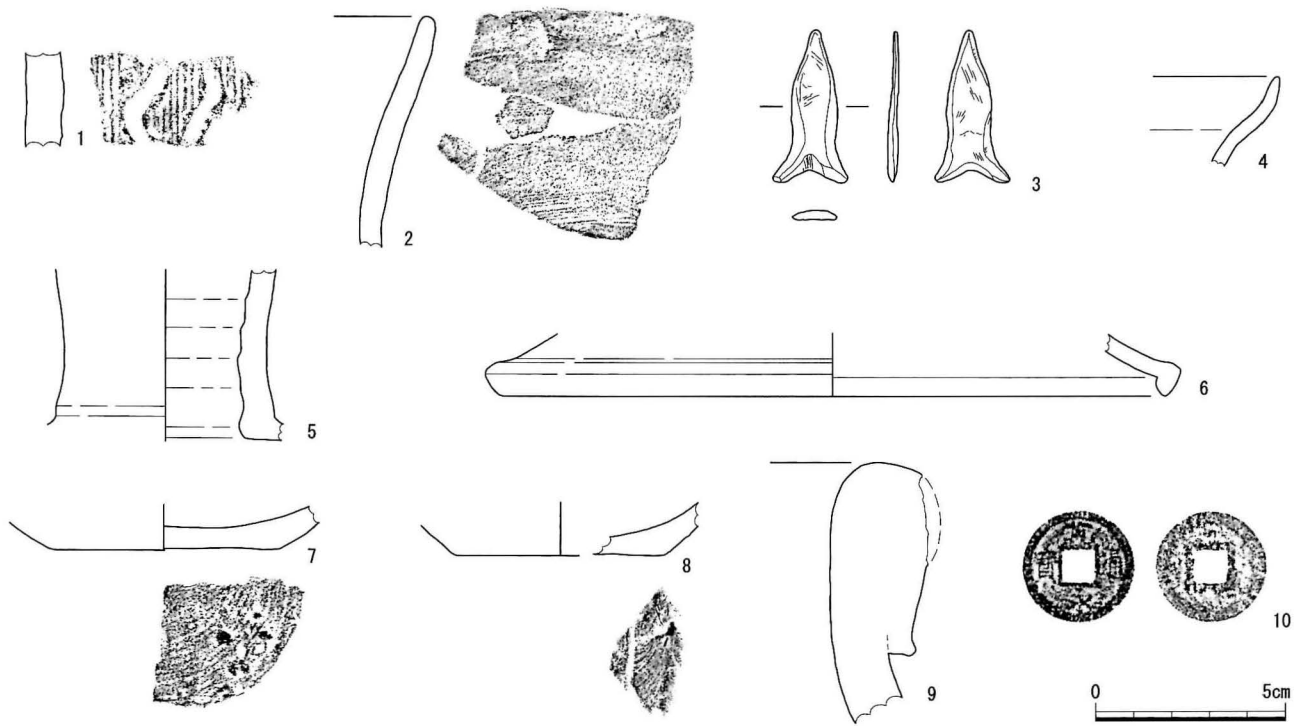
第7図 調査地全体図 (S=1/300)



第8図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

住宅建設範囲の東西に1m×2mの試掘グリッドを2箇所設け、人力により掘り下げを行った(第7図)。その結果、古い時代の遺構等は検出されず、時代の新しい(近世以降)の造成土と遺物を散漫に包含する二次堆積とみられる厚い暗褐色堆積土が確認された(第8図)。

1グリッドでは表土下30cmは固くしまった造成土(1層)で、当該地に蔵が建っていたということから、床あるいは基礎の地盤固めによるためと推測。下層は黒色土であるがわずかに色調の異なる堆積が数層重なっている(2層)。斜面上方から下方(東から西)に傾斜するように堆積しており、弥生時代から中・近世までの遺物を含んでいた。3層は地山のような安定した暗褐色土の堆積であるが、遺物も含まれており、様相は判然としなかった。ローム土まで確認することができなかったが、工事による掘削範囲を下回ったことから、以下の掘り下げは行わなかった。



第9図 角道通り遺跡出土遺物 (S=1/2、10のみ2/3)

第2表 角道通り遺跡出土遺物観察表

番号	時代	器種	法量 (cm)	整形・調整	焼成	残量・色調	胎土・特徴	出土位置
9図1	縄文中期	土器 甕	口径 底径 器高 — — —	内面 横ナデ 外面 縦沈線文・波状凹線文	良好	小片 内外面 暗赤褐色	緻密、砂混和、縦方向密に楕円状沈線を施文、上から太めの凹線2条波状に施文	1G3層
9図2	弥生後期	土器 甕	— — —	内面 細かいナデ磨き 外面 ハケナデ、櫛描文	良好	口縁小片 内面 褐色～淡赤褐色 外面 褐色	緻密、細雲母・砂粒含む、緩く開く口縁で端部は指先で整形、外面は全面ハケ痕残り頸部は特に明瞭、丁寧な施文ではない	1G2層・1G排土
9図3	弥生	磨製石鏃	全長 最大幅 厚さ 4 2 0.3	表裏面 研磨		完形 表裏面 淡灰緑色	緑色片岩か粘板岩製、鏃身中ほどが膨らむ、逆刺は外側にわずかに反る、研磨条痕残す	1G2層
9図4	古墳後期	土師器 坏	— — —	内外面 細かい横ナデ磨き、漆黒色処理	良好	口縁小片 内外面 暗橙～黒色	緻密、赤色粒含む、口縁端部は尖り垂直に近い、体部なかほどで屈曲、器面に黒漆塗布	1G1層
9図5	古墳後期	須恵器 瓶	頸部径 (5.8) — —	内外面 ロクロ成形、自然釉	良好	頸部小片 内外面 灰色地に緑黄色～暗褐色釉	緻密、内面ロクロ目顕著に残す、古墳時代後・終末期の猿投窯産、古墳副葬品と推定	1G2層
9図6	奈良平安	須恵器 坏蓋	口径 天井径 器高 (17.5) — —	内外面 ロクロ成形	良好	口縁小片 内外面 黒灰～暗灰色	緻密、細かな砂粒含む、口縁端部の字に折り返す、火傷痕、焼成良いが断面赤っぽい	1G3層
9図7	平安	土師器 坏	口径 底径 器高 — (6) —	内面 炭素吸着黒色処理 外面 底部回転糸切り未調整	良好	底部小片 内面 黒色 外面 暗赤褐色	緻密、砂粒含む、内面黒色処理土師器、体部ややまるみをもって立ち上がる	1G2層
9図8	平安	土師器 坏	— (5.5) —	内面 炭素吸着黒色処理 外面 底部回転糸切り未調整	良	口縁小片 内面 黒色 外面 淡褐色、黒斑	緻密、砂混和、内面黒色処理土師器、内面磨きと炭素吸着	1G3層
9図9	中世?	陶器 大甕壺	— — —	内外面 横ナデ整形、口縁折り返し玉縁	良好	口縁部小片 内外面 赤褐～暗赤褐色	緻密、砂混和、固く焼きしめる、垂直に立ち上がる口縁、断面楕円形で外面に折り返し縁	1G3層
9図10	近世	銭貨	縦 横 厚さ 2.25 2.21 0.11	鋳造		完形 内外面 濃緑色	「寛永通寶」銅銭、劣化で刻印不鮮明	1G2層

2 グリッドは掘り下げ前から地山が露出したような土で、数十cm掘り下げたが暗黄褐色砂質土で、地山と判断した。東側の宅地とは3m程度の高低差があるので調査地の東側は斜面を切土していると思われ、遺構・遺物の包含されていたであろう堆積土は削平されていることが確認された。

遺物は1グリッドのみ出土で少量。弥生・古墳・平安時代の遺物を主体に、縄文時代および中・近世のものが数点出土した(第9図)。1は縄文中期の土器。2は弥生時代後期とみられる甕の口縁。3は磨製石鏃。薄造りで身の中ほどが張るように膨らむ。両脚はハの字にはねるように開く。丁寧に研磨して仕上げている。4は古墳時代後期の土師器丸底坏で、内外面を漆黒色処理する。5は須恵器瓶類の口

頸部。灰白色胎土と緑黄色釉の特徴から猿投窯産と推定。古墳時代後期から終末期の製品と思われる。6は須恵器蓋の口縁端で、折り返しと天井の屈曲・焼成具合から、8世紀後半から9世紀にかけてのものとして推定。7・8は内面炭素吸着黒色処理の無台土師器坏で、底部は回転糸切り無調整。奈良時代末から平安時代のもの。9は陶器大甕の口縁部、断面楕円形の玉縁を作り破損部以下は肩になるような器形。産地と年代については類例を求めることができていない。近世または中世に遡るかもしれない。10は「寛永通宝」銅銭。表面が錆劣化し陽刻が不明瞭。凶化以外には奈良・平安時代の須恵器坏が数個体、土師器甕片もみられる。縄文時代遺物は希薄である。

8. 総括

磨製石鏃は弥生時代と推定したが、確証はなく類例をさらに求めたい。ひとつ北の扇状地には磨製石剣が出土したミシャグチ平遺跡があり、弥生時代の集落が広範に存在したかもしれない。

猿投窯産とみられる須恵器瓶類口縁片が出土したことは重要である。後期古墳の副葬品に多い器種で、諏訪地域においても古墳から出土している。近年発掘調査された茅野市の永明寺山古墳でも猿投窯産の平瓶や横瓶・甕、湖西窯産のフラスコ形瓶が出土している（茅野市教育委員会 2016）。小さな破片ではあるが、間接的に古墳の存在を傍証しているといえる。

古墳の所在地（推定地）を整理しておきたい。調査地南側に御頭御社宮司社があるが、ここが御頭ミシャグチ古墳とされる（諏訪市教育委員会 1983）。現地には石室構築に利用された可能性が考えられる平らな巨石が石碑やその台石に使われている。『信濃史料 第一巻 上』は古墳の所在地が地番で示されており、それによると調査地（4433番地）は角堂第2号墳、西側4439番地に1号墳、4437番地に3号墳となっている（信濃史料刊行会 1956）。いずれも現状ではその痕跡を確認できない。

『諏訪史 第一巻』の表中では角道古墳は矢崎安次（二）郎宅で、石垣修繕の時に直刀が発掘され、所在は東京帝室博物館と記されている（鳥居龍藏 1924）。東京国立博物館のホームページ画像検索では角道古墳のものは該当がない。ただ、「上桑原四ツ塚古墳」出土の直刀（短刀）が確認できる。一方で『諏訪史 第一巻』では、四ツ塚古墳の出土品は所在不明となっている。このことから、遺跡と遺物で錯誤が起こっているのではとも考えられ、四ツ塚古墳出土とされている東京国立博物館収蔵の直刀は、角道古墳出土の可能性もあるのではないかと考えた。角道古墳も御頭ミシャグチ古墳も含めて4つあったことから、四ツ塚と呼ばれた可能性もあるだろう。

幅の狭い急峻な扇状地ではあるが、後期古墳の密集では市内最多である。また、近接する昼タエ遺跡には古墳時代中期に遡る古墳が所在している可能性もある（諏訪市教育委員会 2013）。墳丘を失った古墳の正確な所在地と、被葬者の集落域や生産域の特定が課題である。

<引用・参考文献>

信濃史料刊行会 1956『信濃史料 第一巻 上』

諏訪市教育委員会 1983『諏訪市の遺跡』

諏訪市教育委員会 1999『市内遺跡発掘調査報告書 - 長野県諏訪市平成10年度市内遺跡発掘調査報告書 - 』

諏訪市教育委員会 2006『市内遺跡試掘調査報告書（平成17年度） - 長野県諏訪市内遺跡試掘調査報告書 - 』

諏訪市教育委員会 2013『市内遺跡発掘調査報告書（平成24年度） - 長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書 - 』

茅野市教育委員会 2016『永明寺山古墳』

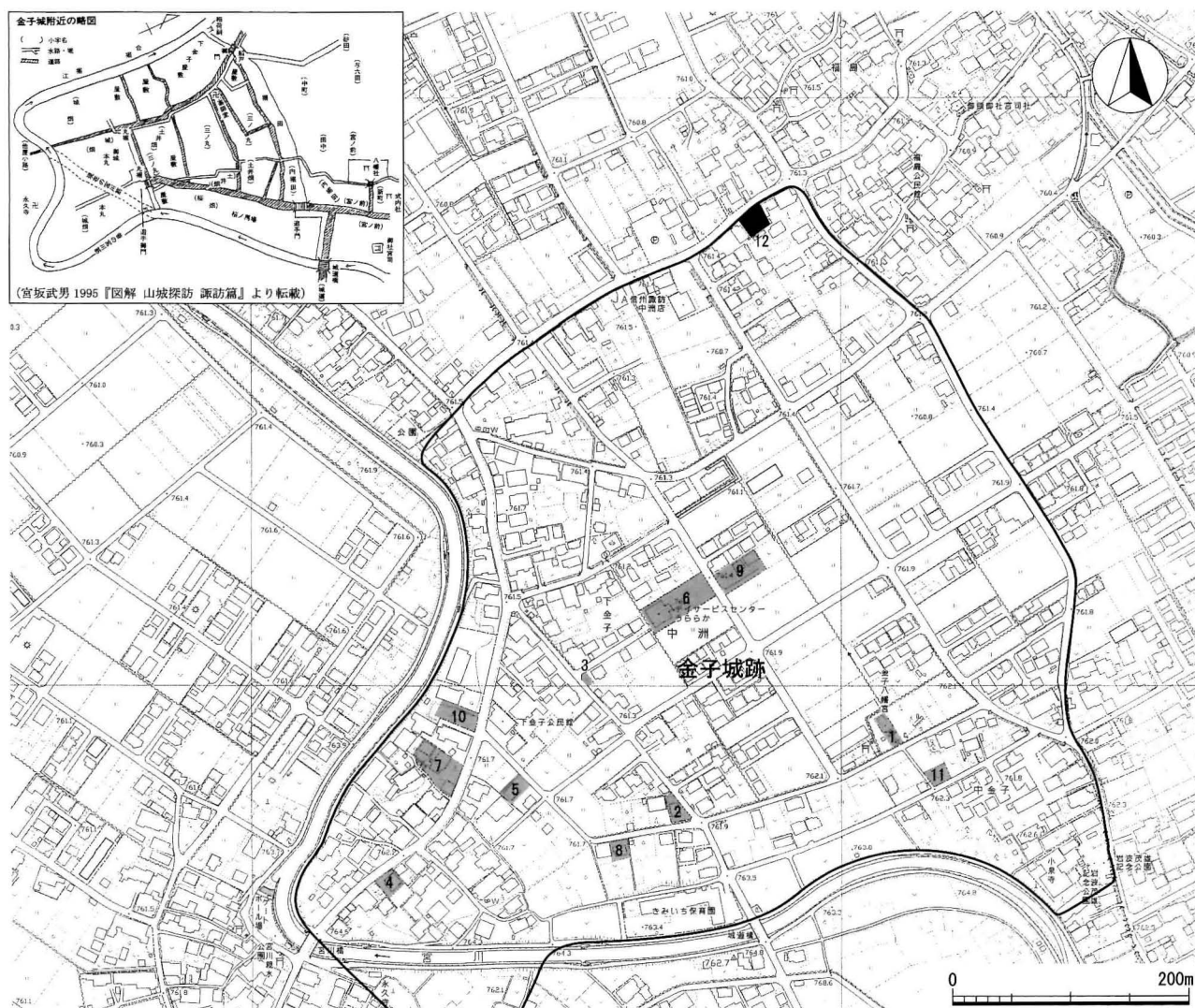
鳥居龍藏 1924『諏訪史 第一巻』信濃教育會諏訪部會

IV 金子城跡（第12次）

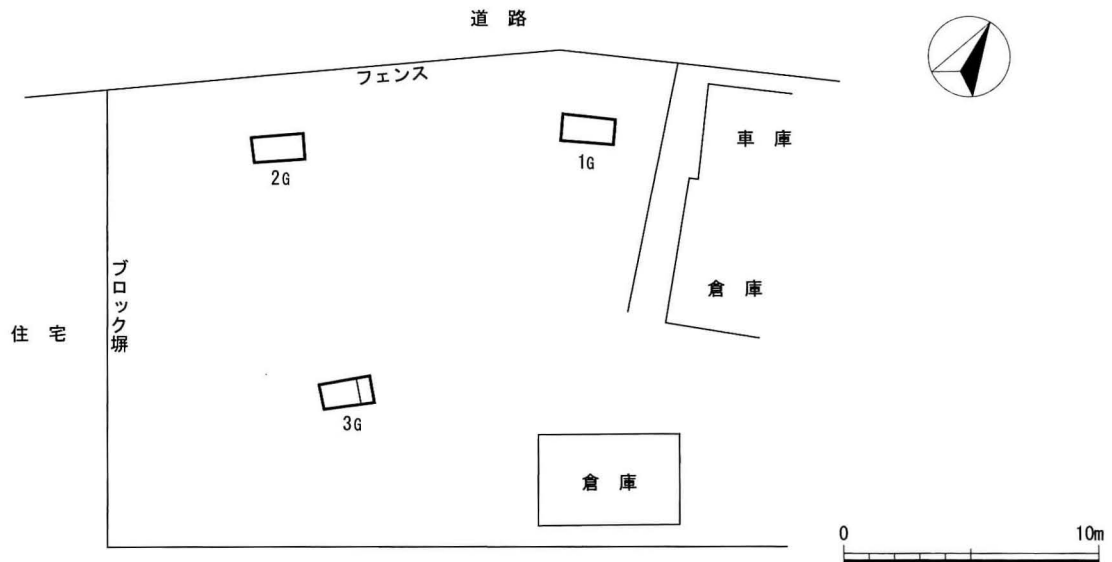
- | | | | |
|---------|------------------|---------|------------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市中洲町田 3771-1 他 | 4. 調査目的 | 宅地造成に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 | 平成 28 年 7 月 11 日 | 5. 検出遺構 | なし |
| 3. 調査面積 | 6 m ² | 6. 出土遺物 | 陶器・磁器・ガラス製品（近現代） |

7. 遺跡概要及び調査概要

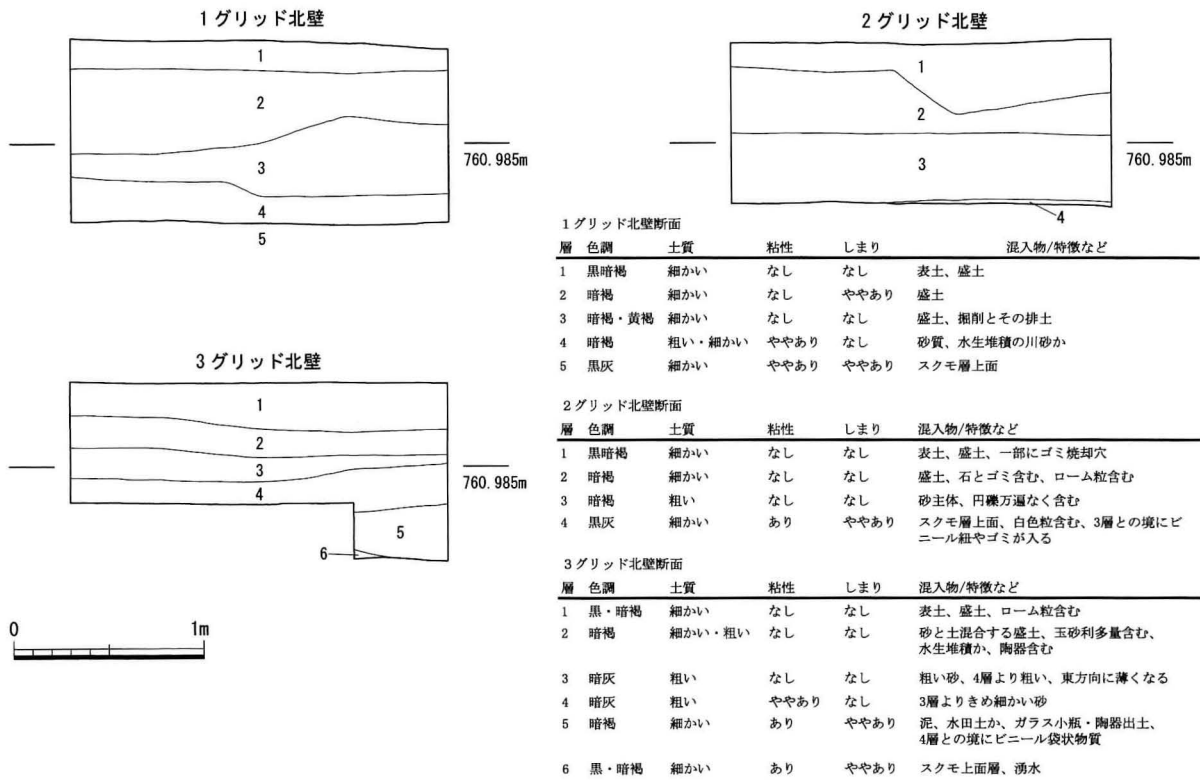
金子城跡は諏訪盆地の中央部、宮川の流れが大きく屈曲する内側に位置する（第 10 図）。戦国時代、武田氏・織田氏の滅亡後に諏訪を奪還した諏訪頼忠が天正 12 年（1584 年）に修築した城とされる。その後、天正 18 年（1590 年）の小田原征伐ののち頼忠は武蔵国奈良梨へ移り、諏訪氏の手から離れることとなる。代わって諏訪に入った豊臣秀吉の武将、日根野高吉は文禄元年（1592 年）より諏訪湖畔に新たに高島城の築城を始め、その城の用材として金子城の資材を取り壊して運び出したといい、現在は城と分かる建造物は残っていない。ただ、「三ノ丸」、「縄手」、「城畑」などの小字地名は残っており、大よその城下の作りは推定されるところである（宮坂武男 1995）。



第 10 図 金子城跡位置図 (S=1/6,000)



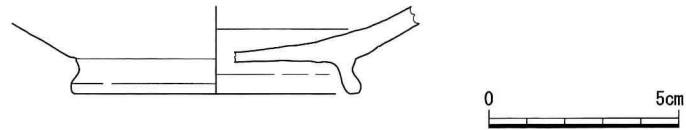
第 1 1 図 調査地全体図 (S=1/300)



第 1 2 図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

金子城は諏訪で最初の本格的平城として築かれ、東側以外は宮川の流路を利用した自然の堀としていた。これに人工の堀や水路を巡らすことで効率的に造られた城である。過去に 11 回の調査を行っているが城に関わる遺構などの検出はなく、遺跡の様子は現在まで不明である。

今回の調査地は、包蔵地範囲の北端にあたる道路沿いの更地である。本丸から見て北東・鬼門の方向であるが、城郭・城下に関わるものがあつたかは定かでない。近世「福島」村の一部としての性格で捉えるほうが良いかもしれない。東 200m には御頭御社宮司社があつて本殿（木造祠）は諏訪の大工、二代立川和四郎富昌が嘉永 2 年（1849）に制作したものである。道路は神社のところで鍵の手になって、東進した先の畑地は、かつて鬼門除けとして地藏寺があつたが、江戸時代になって上諏訪岡村の現在地



第 13 図 金子城跡採集の灰釉陶器 (S=1/2)

に移転したという。道路は「白狐線」と呼ばれる市道で、四賀普門寺の国道 20 号線と湖南大熊の県道岡谷茅野線を結ぶ交通量の多い道路である。

調査地は道路沿いの更地で、道路より 15cm 高くなる。過去の土地利用は畑あるいは建物があったこともある。1m×2mの試掘グリッドを 3箇所設けて、人力によって掘り下げを行った(第 11 図)。

その結果、他所から搬入されたと推定される造成土が各グリッドで確認でき、ガラスやタイル、プラスチックやビニールをわずかに含んでいた(第 12 図)。新しい時期に人の手が加わっていると判断された。造成土の下、地表下 90cmから 1mで濃灰色粘土堆積に達した。中洲地区一帯で見られるスクモ層で、以下に遺構等の分布は無いと判断し、調査を終了した。この結果から、本調査地は今後の土木工事等によって本調査を行う必要はないと確認された。

なお、発掘届の提出および調査時点では分譲住宅用の宅地造成を予定していたが、のちにコンビニエンスストア建設に変更となり、改めて発掘届の提出および工事立会いの措置をとった。

8. 総括

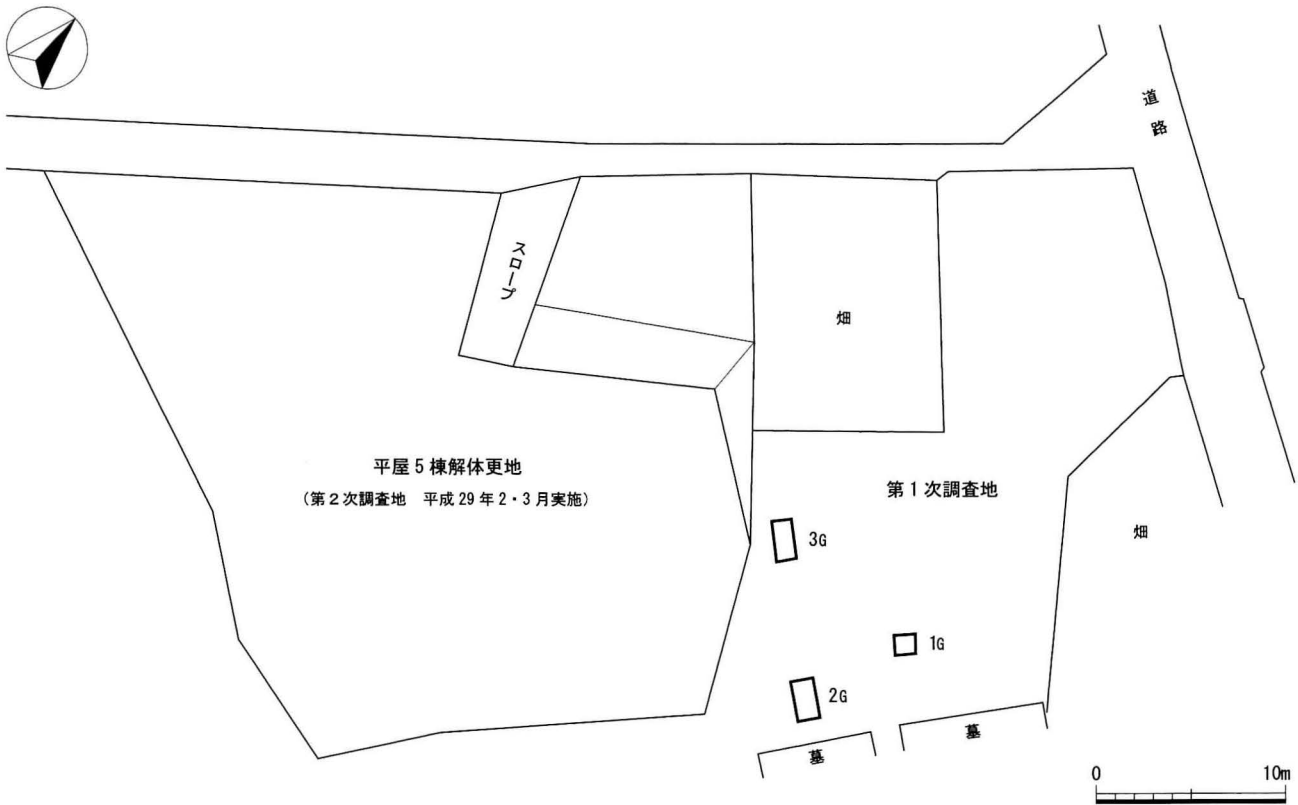
調査地は金子城跡として包蔵地範囲になっているが、どのような根拠によって範囲内になっているかは定かでない。近世に遡るであろう白狐線沿いで、鍵の手と推定される箇所を城の内と外とを分けるようにした場合に、城内という認識も可能であろうか。

工事立会い時に、灰釉陶器碗が表面採集された(第 13 図)。高台の付く底部片で、器厚は薄く丁寧な整形、透明釉が内面見込みより上に掛かる。平安時代のものにみられたが、中・近世の可能性もありえると思われ特定できていない。仮に中世以前であったとして、当地にその当時の実態があったかどうかは分からない。表面採集であり、1m近い盛土造成を考慮すると、搬入された土に含まれていた可能性も排除できないだろう。

金子城は諏訪市内で最大級の包蔵地面積であるが遺構・遺物の出土はほぼない。特に包蔵地東側の圃場整備地域(近年は宅地化が急速に進んでいる)では、発掘で検出できるものは諏訪湖・低湿地に起因する泥層(スクモ層)のみである。一方で本丸推定地は古くからの住宅地で、調査はほぼ実施されておらず情報量が少ない。第 10 次調査では中世に遡る可能性がある志野焼の端反皿や近世(後期から幕末)の陶磁器が出土し(諏訪市教育委員会 2012)、遺跡西側の城郭や屋敷地には遺構などの分布する可能性をうかがわせるものであった。住宅建て替えなどの機会には調査を実施し、金子城跡の実態把握に努めたい。

<引用・参考文献>

- 諏訪市教育委員会 2012「金子城跡(第 10 次)」『市内遺跡発掘調査報告書(平成 23 年度)』
- 宮坂武男 1995『図解山城探訪諏訪篇』



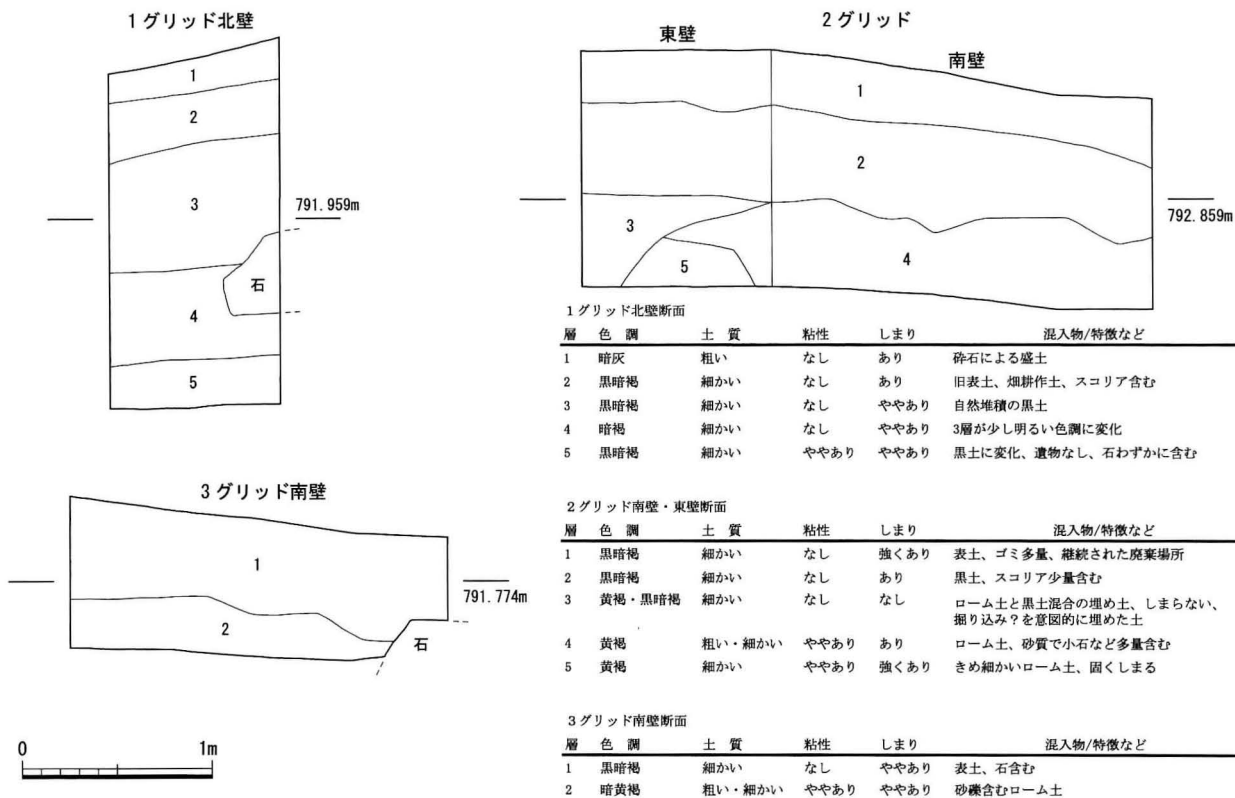
第15図 調査地全体図 (S=1/400)

は更地であった。また、南側は水田であったが、昭和44年に木造平屋建て住宅5棟が建設されていた。これらについては第1次調査前の平成28年8月に解体されて更地となった。

第1次調査地では1m×2mのグリッド2箇所と1m×1mグリッド1箇所を設けて人力により掘り下げを行った。1グリッドは黒色土が2m近く続き、黒耀石の細片がわずかに出土した(第16図)。掘り下げ底面でローム土への漸移的な色調変化はあった。2グリッドでは黒色土堆積は70cmから80cmあって、その下は漸移土がなく明瞭な境をもってローム土に変化した。ローム土はソフトローム土からやや固くしめるローム土に達する深さであったことから、当該地ではローム層上面までを削平するような切土がいつかの時点で行われている。平面および東壁ではグリッド中央から北壁の先に続くようなローム土を切る掘り込みが確認でき、石が数個まとまって検出された。掘り込みを埋めている土は黒土とローム土の混合した土で、しまりがなくやわらかい。遺物は伴わないが古い時代のものではないと推定。遺物は表土と黒色土から黒耀石剥片と土師器(またはカワラケか)と陶器片がわずかに出土した。ローム土からは1点も出土していない。3グリッドでは黒色土の堆積が50cmほどで、漸移的にローム土に変化した。遺物は黒色土から黒耀石剥片はわずかに出土した程度である。

以上の結果から、当該地については明らかな遺構はなく、黒耀石剥片の出土も黒色土までで、石器製作に伴うような集中的出土ではないことから流れ込み程度と判断した。工事では山側の切土が発生するが、その範囲内では遺構等に影響ないとみられたことから調査を終了した。

調査グリッドからの遺物出土はわずかである。旧石器時代の尖頭器製作に伴って生じる剥片が主で、近世以降の陶器片と古代末から中世になるような土師器(またはカワラケか)が1点出土した。縄文土器は出土していない。調査地および南側の建物解体更地(第2次調査地)での黒耀石製遺物の表面採集が多い。とくに更地では第1次調査の直前まで建物解体と地均しが行われていたことから表土が良好に観察でき、尖頭器5点、剥片約100点、縄文時代と推定される打製石斧1点が採集された(写真図版8)。



第16図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

剥片は旧石器時代の尖頭器製作に関わるものであると推定され、縄文時代的な様相は見られない。打製石斧があるが縄文土器は1点も出土・表採されておらず、当該地での縄文時代痕跡は希薄である。

8. 総括

温泉寺横遺跡では旧石器時代の尖頭器製作に関わる黒耀石製遺物が出土および採集されたことから、同地に製作の場が存在したものと考えられる。丘陵崖下という遺跡立地は、近接する上ノ平遺跡の谷底に遺構分布が確認されたことと共通する様相であろう。遺跡から尾根に登った天神山城跡では細石器石核が出土しているが(鳥田・中島 1995、諏訪市博物館 2002)、調査地では細石器とみられる遺物は確認できず、近い距離の尾根と谷であっても時代あるいは製作した種類に違いがあるようである。

温泉寺横遺跡の周辺では谷奥の上ノ平遺跡をはじめ、周囲 500m以内に茶白山・手長丘・北踊場遺跡などの「諏訪湖東岸遺跡群」と称される旧石器時代遺跡が密集して所在している(諏訪市 1995、諏訪市博物館 2002)。霧ヶ峰高原一帯の黒耀石原産地から入手した豊富な材料をもとに、集中的に石器製作を行ったことは容易に想像されるが、それらの実態は一様ではなく、個々に時代や遺物に違いをみせる。

また、本遺跡については近世高島藩主の葬送儀式的推定地でもあるのだが、関連するような遺構・遺物は発見されず、情報は得られなかった。

<引用・参考文献>

杉原壮介 1981『長野県上ノ平の尖頭器石器文化』臨川書店

諏訪市 1995『諏訪市史 上巻』

諏訪市教育委員会 1996『上ノ平Ⅱ - 長野県諏訪市上ノ平遺跡第4次調査概要報告書 - 』

諏訪市教育委員会 2013『高島藩主廟所 - 長野県諏訪市高島藩主廟所第1次発掘調査報告書 - 』

諏訪市博物館 2002『茶白山遺跡発掘50周年記念 諏訪の旧石器展(諏訪市会場) 展示図録』

鳥田和夫・中島透 1995「諏訪湖東岸遺跡群採集の細石器」『長野県考古学会誌』76 長野県考古学会

VI 御屋敷遺跡（第2次）

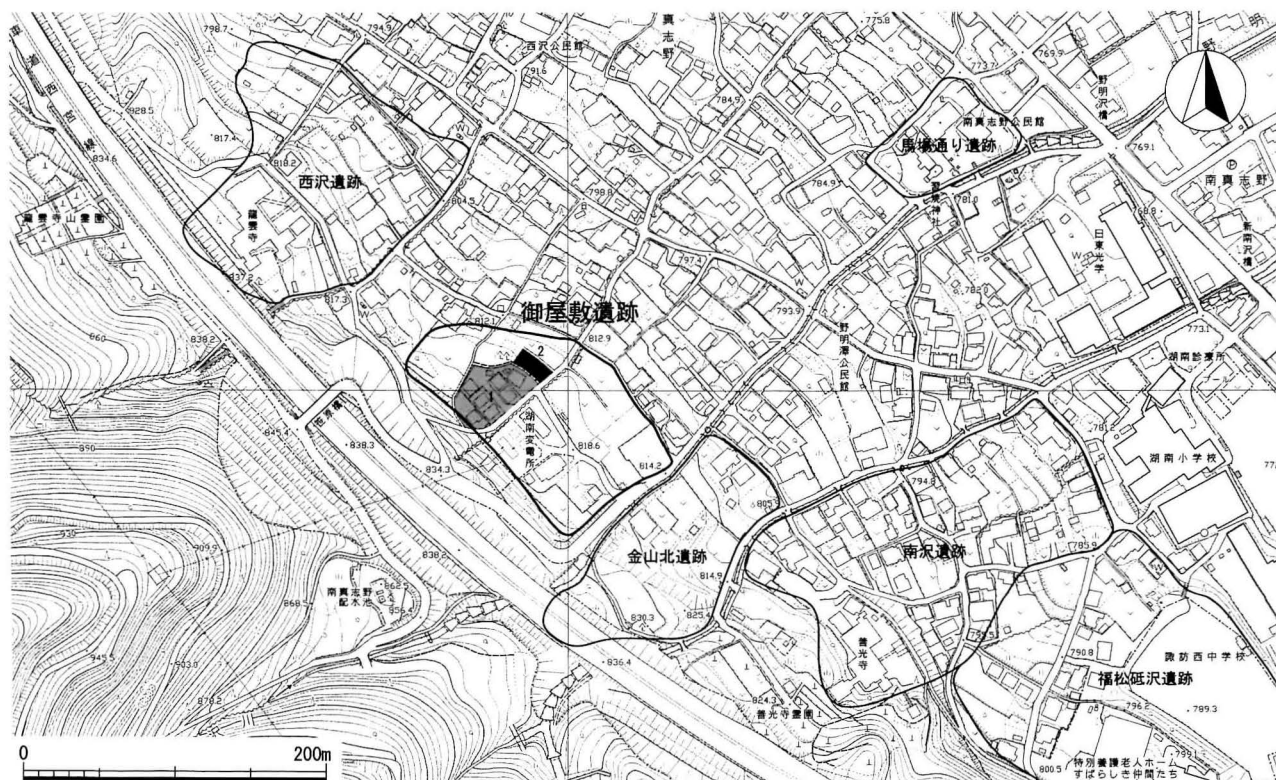
- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市湖南中村沢通 4826 番 1 | 4. 調査目的 土地売買に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成 28 年 10 月 4 日～7 日 | 5. 検出遺構 なし |
| 3. 調査面積 42 m ² | 6. 出土遺物 土器・石器（縄文）・陶磁器（近代） |

7. 遺跡概要及び調査概要

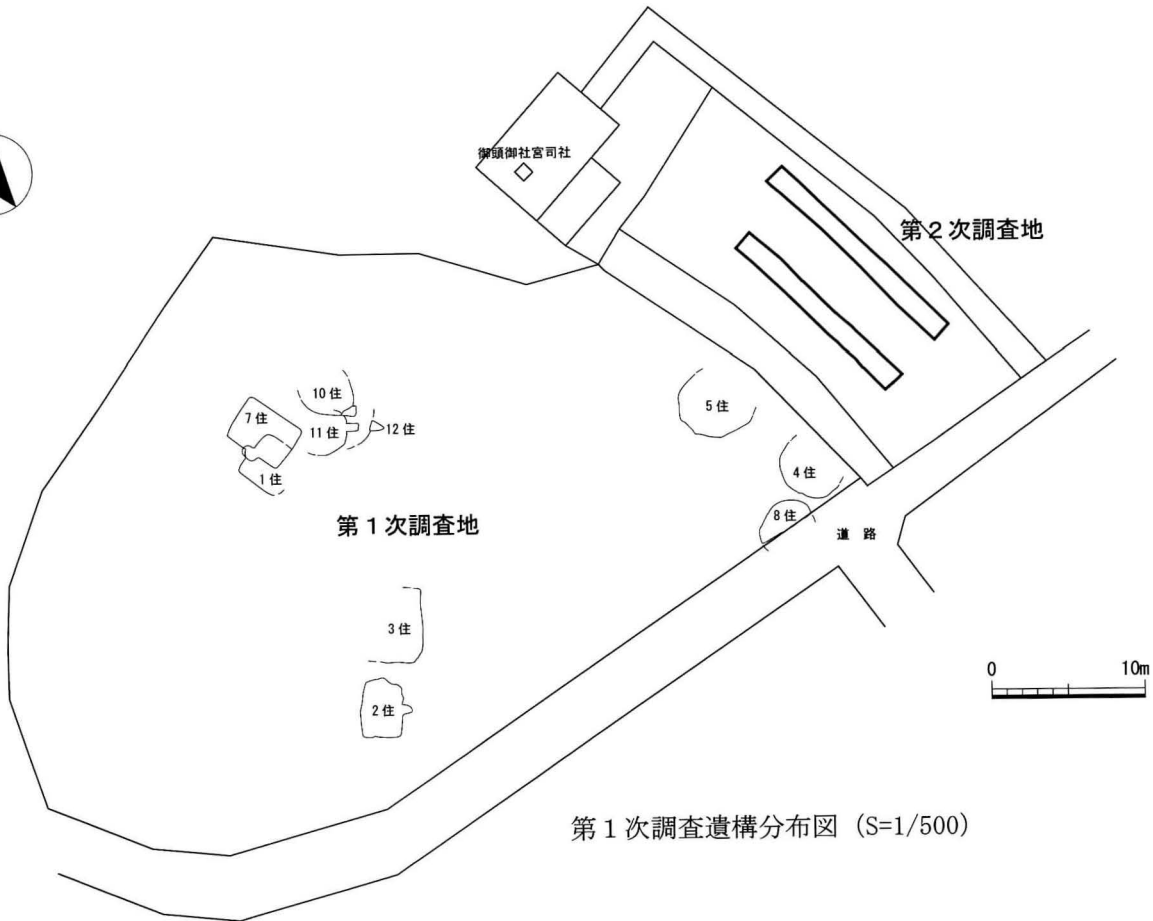
御屋敷遺跡は湖南南真志野地籍、野明沢や西沢など複数の小河川によって形成された扇状地にある（第 17 図）。背後は中央自動車道が通り、そこを境に急激に傾斜をきつくる山地となる。扇状地の縦幅は短く、高速道路から県道までの約 450m で 60m 程度下がり、県道より東は諏訪湖の低湿地となる。遺跡は松尾山善光寺と風穴山龍雲寺に挟まれた南北約 130m、東西約 140m の範囲である。昭和 57 年に宅地造成に先立って発掘調査が行われ、縄文・弥生・平安時代の竪穴建物跡が検出されている（第 18 図上段）。今回はそれ以来の調査であり、隣接地でもある。野明沢川を挟んだ南には金山北遺跡、南沢遺跡、福松砥沢遺跡と扇状地の扇頂部を中心に遺跡が続く。

今回は第 1 次調査地の東隣接地について、所有者より土地売買などの参考とするために遺跡有無確認の相談・要望があったことから、分布確認の試掘調査を実施した。長さ 15m、幅 1.5m のトレンチを 2 本設定し、重機および人力によって掘り下げを行った（第 18 図下段）。第 1 次調査の 4 号住居趾と 5 号住居趾（どちらも縄文時代）は調査区外の東側に延長しており、今回の調査地に及んでいたとみられ、さらに遺構の分布する期待もあった。

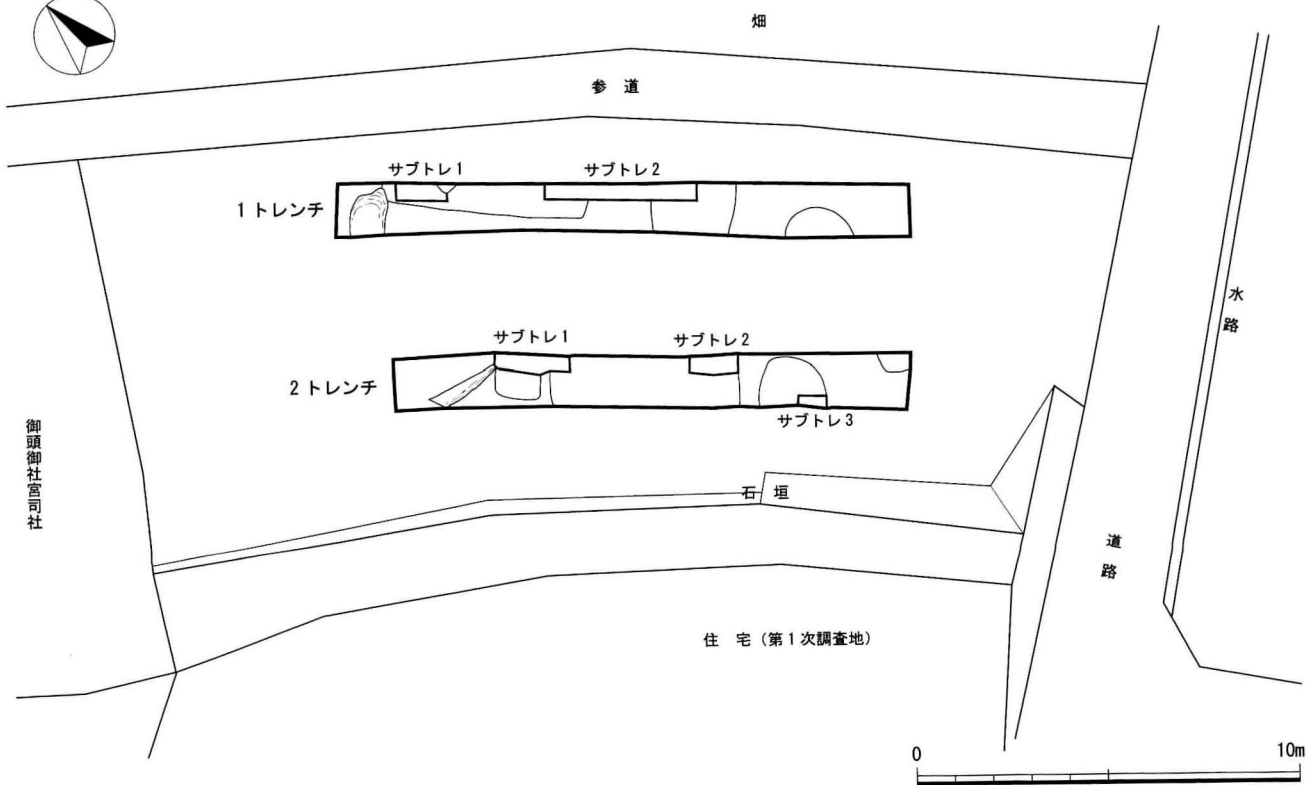
平面プランの確認で両トレンチとも遺構らしき痕跡を確認したことから、サブトレンチでその性格と



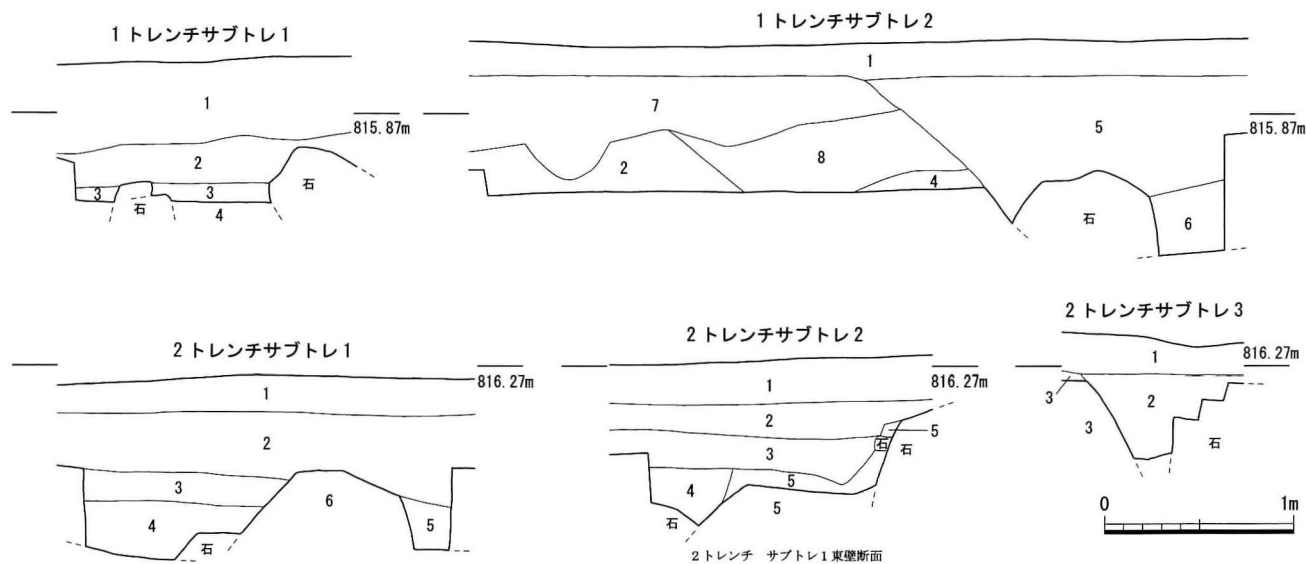
第 17 図 御屋敷遺跡位置図 (S=1/5,000)



第1次調査遺構分布図 (S=1/500)



第18図 調査地全体図 (S=1/200)



1 トレンチ サブトレ1東壁・サブトレ2東壁断面

色調	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1 黒褐	細かい	なし	なし	表土、畑耕作土
2 黒	細かい	なし	なし	自然堆積の黒土、縄文土器1点
3 暗灰褐	細かい	なし	なし	自然堆積、ローム土漸移土、
4 黄褐	細かい	なし	なし	ローム土上面、大小の石を多量含む
5 暗褐	細かい	なし	なし	掘り込みの埋め土、表土との違いはぼなし
6 暗褐・黄褐	細かい	なし	なし	掘り込みの埋め土、ロームブロック多量、暗褐土とローム土混合し埋められる、しまらない
7 暗褐	細かい	なし	なし	掘り込みに切られる、表土との違いはぼなし
8 暗褐	細かい	なし	なし	暗褐色土にローム粒が含まれる

2 トレンチ サブトレ1東壁断面

層	色調	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1	黒褐	細かい	なし	なし	表土、畑耕作土
2	黒褐	細かい	ややあり	なし	やわらかい、ローム粒わずか含む
3	黒褐	細かい	ややあり	なし	ロームブロック含む
4	暗褐	細かい	なし	なし	石主体で隙間に土入り込む
5	暗褐・黄褐	細かい	なし	なし	ローム土と褐色土の混合、しまらない埋め土
6	黄褐	細かい	なし	強くあり	地山ローム土、石多量含む、固くしまる

2 トレンチ サブトレ2東壁断面

層	色調	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1	黒褐	細かい	なし	なし	表土、畑耕作土
2	黒褐	細かい	なし	なし	1層の土にローム粒混ざる
3	黒褐・黄褐	細かい	なし	なし	1・2層の土にロームブロック入る
4	黄褐・暗褐	細かい	なし	なし	石主体で隙間に土入り込む
5	黄褐	細かい	ややあり	あり	地山ローム土、わずかに砂質、大石多量含む

2 トレンチ サブトレ3西壁断面

層	色調	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1	黒褐	細かい	なし	なし	表土、畑耕作土
2	黒褐	細かい	なし	なし	石主体で隙間に土入り込む
3	黄褐	細かい	なし	ややあり	地山ローム土、掘り込みに切られる

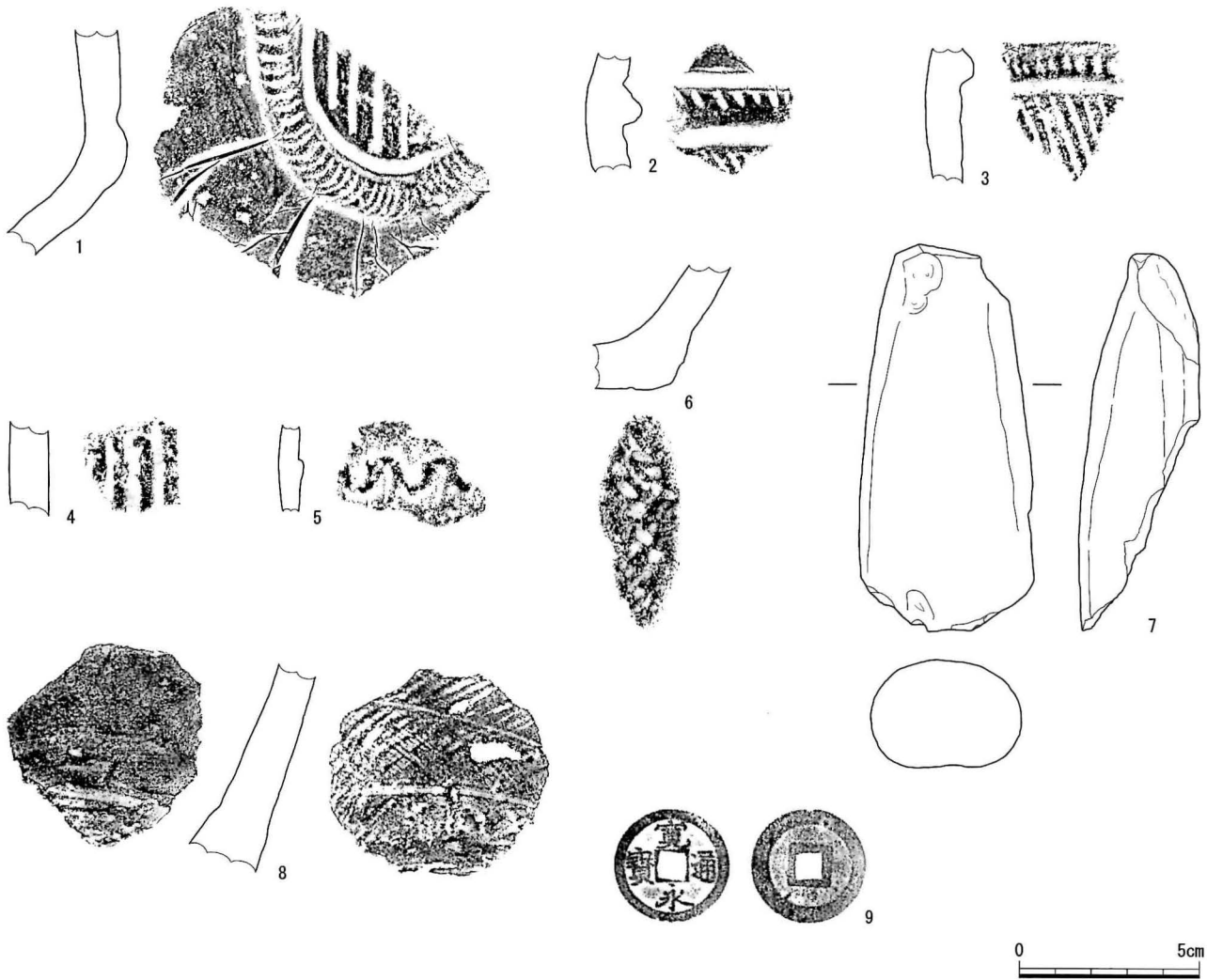
第19図 調査トレンチ断面図 (S=1/40)

時代を確認することにした。結果は近代以降の掘削および埋め土ばかりで、近世以前の遺構は確認できなかった(第19図)。出土遺物も極めて少なく、調査地全体が切土とかく乱土坑で、おそらく存在していたであろう遺構を壊していると判断した。調査地での今後の土木工事等にあたっては、記録保存調査の必要はないと判断した。

出土遺物のごくわずかで、縄文土器3点、黒耀石3点、須恵器1点、陶磁器4点、銭貨1点でいずれも小片である。掲載した遺物は隣接する御頭御社宮司社に向かう砂利敷き参道での表面採集された遺物である(第20図)。おそらく周囲の畑から投棄されたものであろう。縄文土器は中期中葉から後葉で、磨製石斧も同時代と推定。6は1トレンチ北側の黒色土からの出土。8は須恵器甕の胴部下端で、外面は平行叩きとナデ、内面はナデ成形。故意に丸く打ちかいたような形状で、内面は研磨されたのか少し滑らかになっている。9の「寛永通宝」は1トレンチ表土(畑耕作土)からの出土である。

8. 総括

今回の調査地は第1次調査地の東隣りであったが、第1次調査地とでは現況で約3mの高低差があり、住居趾の検出面あるいは床面の高さも下回って現在の地面が形成されているため、残存している可能性は低いと想定していたが、やはり結果としては検出できなかった。宅地や農地にするための平場造成で山側を切土するため、とくに下半は削平されてしまう。また、調査地は平坦面を造成する以外にも複数の土坑掘削と石の投棄穴がみられ、全面的に手が加えられていると推定される。



第20図 御屋敷遺跡出土遺物 (S=1/2、9のみ2/3)

第3表 御屋敷遺跡出土遺物観察表

番号	時代	器種	法量 (cm)	整形・調整	焼成	残量・色調	胎土・特徴	出土位置
20図1	縄文中期	土器 甕壺	口径 底径 器高 — — —	内面 横ナデ 外面 楕円形隆線爪先文区画、縦沈線	良好	小片 内面 暗褐色 外面 赤褐色	やや粗い、砂混和、楕円形区画内に縦沈線文	参道表採
20図2	縄文中期	土器 甕壺	— — —	内面 横ナデ 外面 三角隆線斜行沈線沈線、縄文	良好	小片 内外面 暗褐色	やや粗い、砂混和	参道表採
20図3	縄文中期	土器 甕壺	— — —	外面 斜方向に沈線文、貼付隆線、沈線	良好	小片 内外面 淡褐灰色	緻密、砂混和	参道表採
20図4	縄文中期	土器 甕壺	— — —	内面 ナデ 外面 垂下沈線文	良好	小片 内外面 赤褐色	やや粗い、砂混和	参道表採
20図5	縄文中期	土器 甕壺	— — —	内面 ナデ 外面 粘土紐貼付波状文	良好	小片 内外面 褐色	緻密、砂混和	参道表採
20図6	縄文中期	土器 甕壺	— — —	内外面 ナデ、底部網代痕	良好	小片 内外面 暗黄褐色	やや粗い、砂混和	1T北側黒土
20図7	縄文中期	磨製石斧	残存長 幅 厚さ 10.9 4.9 3.1	表裏面 研磨	良好	1/2残存 表裏面 淡緑色	緑色片岩製、下半打折、断面楕円形	参道表採
20図8	平安	須恵器 甕	— — —	内面 削り 外面 平行叩き、削り	良好	小片 内面 暗灰色 外面 黒灰色	緻密、砂粒含む、須恵器甕の胴部で底部に近い部分、打ち欠いて意図的に円形にする、内面研磨したように滑らか、小さいが転用硯か	参道表採
20図9	近世	銭貨	縦 横 厚さ 2.45 2.45 0.2	鑄造、印判明瞭		完形 内外面 黒～黒緑色	「寛永通寶」銅銭、状態良好	1T表土

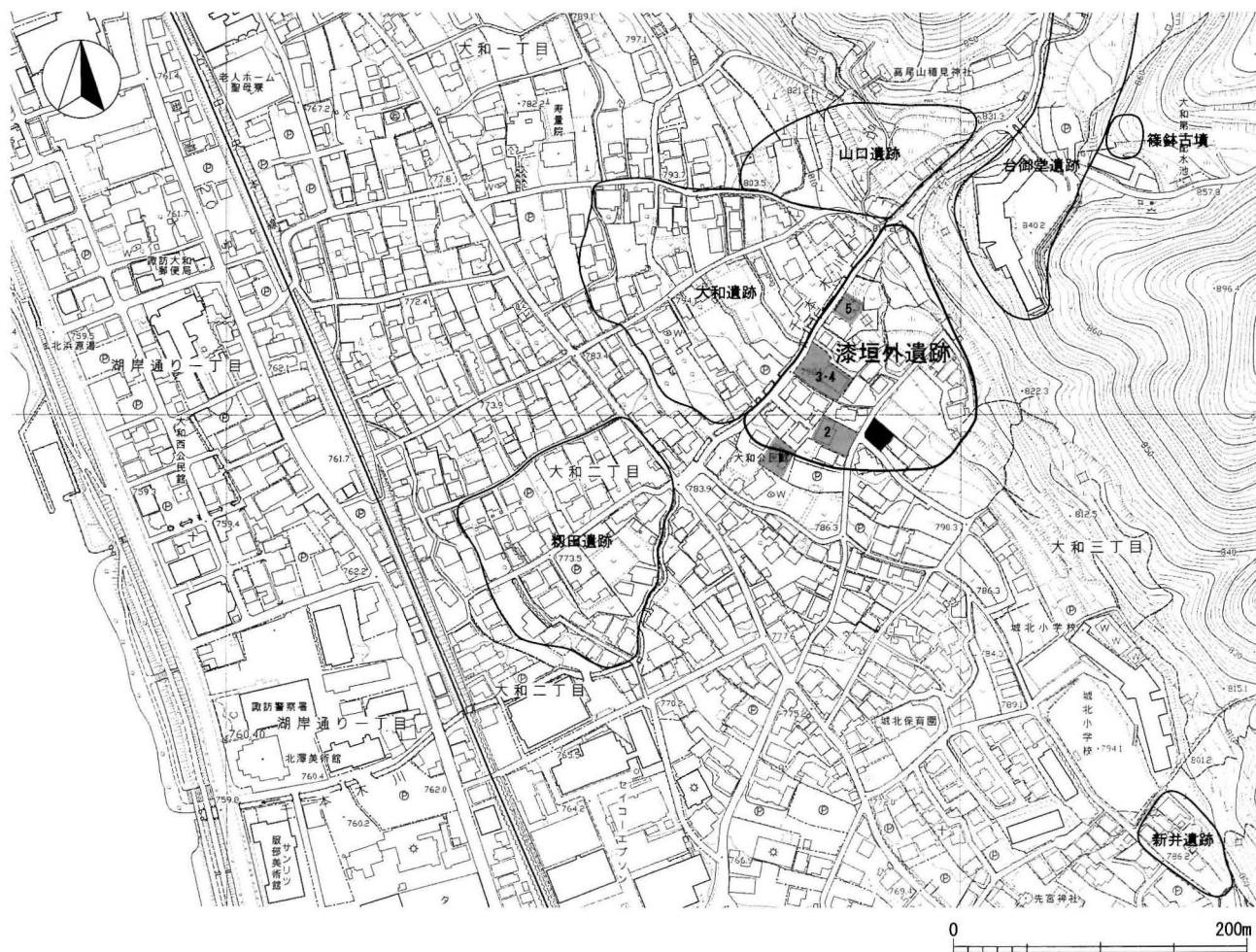
Ⅶ 漆垣外遺跡（第6次）

- | | | | |
|---------|------------------------|---------|-----------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市大和二丁目 11067 番 6 | 4. 調査目的 | 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 | 平成 28 年 12 月 13 日～15 日 | 5. 検出遺構 | なし |
| 3. 調査面積 | 8 m ² | 6. 出土遺物 | 須恵器・灰釉陶器（古代） |

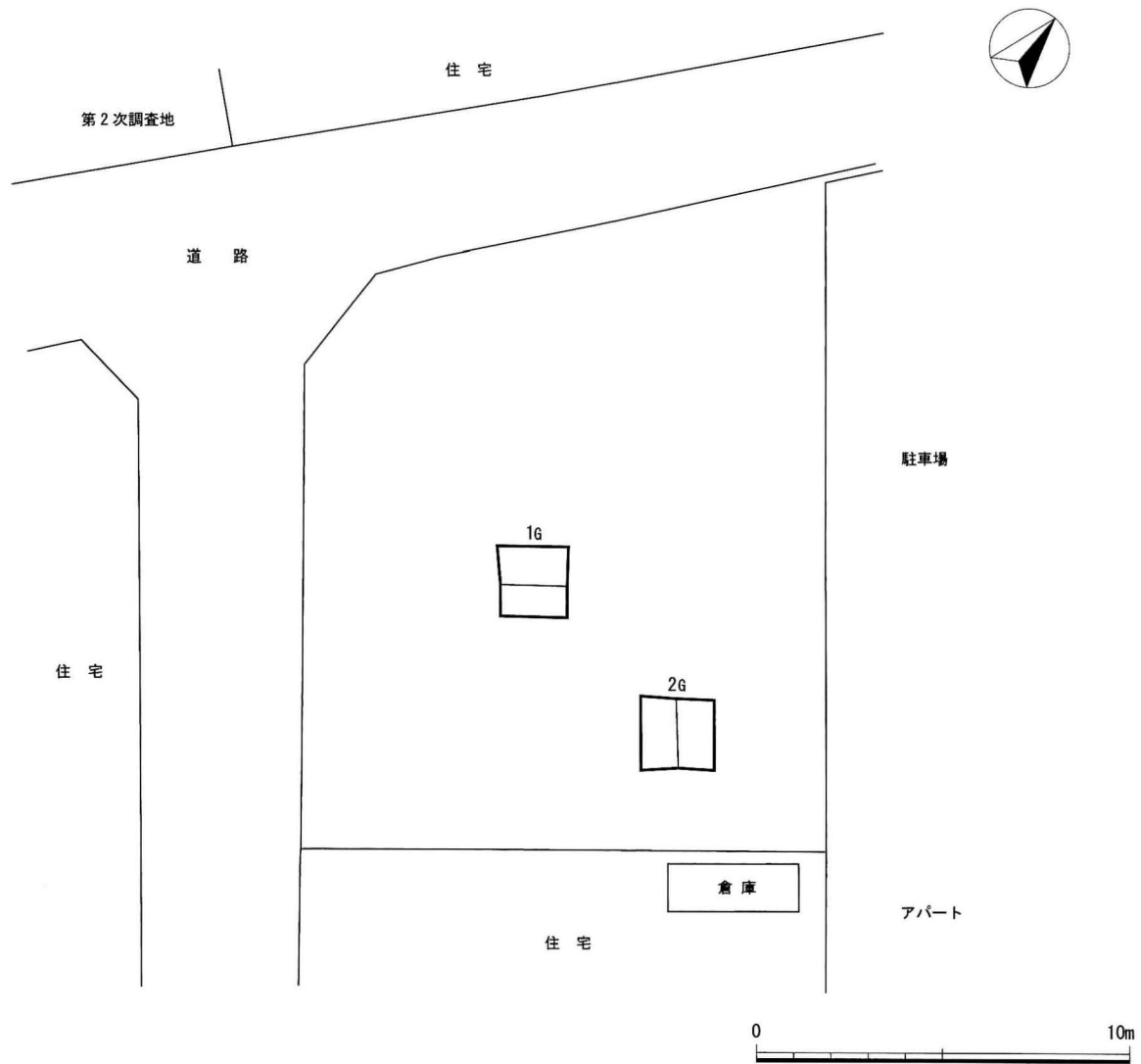
7. 遺跡概要及び調査概要

漆垣外遺跡は諏訪湖東岸にある千本木川の氾濫等により形成された扇状地に立地する、縄文時代から平安時代の遺跡である（第 21 図）。この千本木川が流れ込む諏訪湖沖の湖底には曾根遺跡が立地している。また、本遺跡と同じ左岸上流には縄文時代前期から平安時代の集落跡が検出された台御堂遺跡がある。漆垣外遺跡については第 4 次調査で縄文時代中期末～後期初頭の敷石建物跡が検出されるなどしている（諏訪市教育委員会・漆垣外遺跡発掘調査団 2011）。

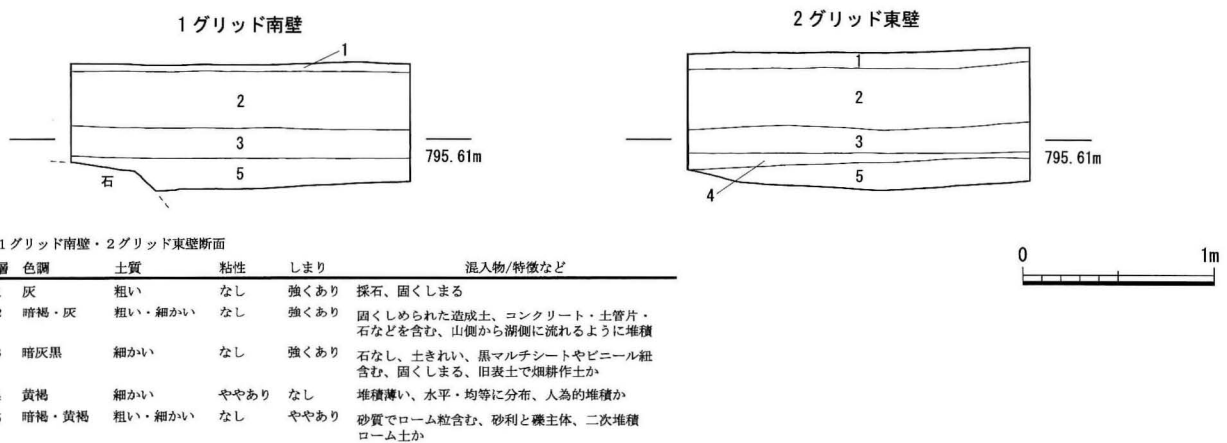
今回の調査地は碎石敷きの駐車場として利用されている宅地で、個人住宅の建設に際して照会があり、発掘届の提出を依頼、事前の試掘調査を実施することとした（第 22 図）。以前は水田か畑だったと近隣住民に聞いたが、詳しくは分からなかった。道路を挟んだ北西側は第 2 次調査地で、遺構不明ながら、縄文時代早期の残存状況の良い絡条体圧痕文土器が出土している（諏訪市教育委員会 2005）。



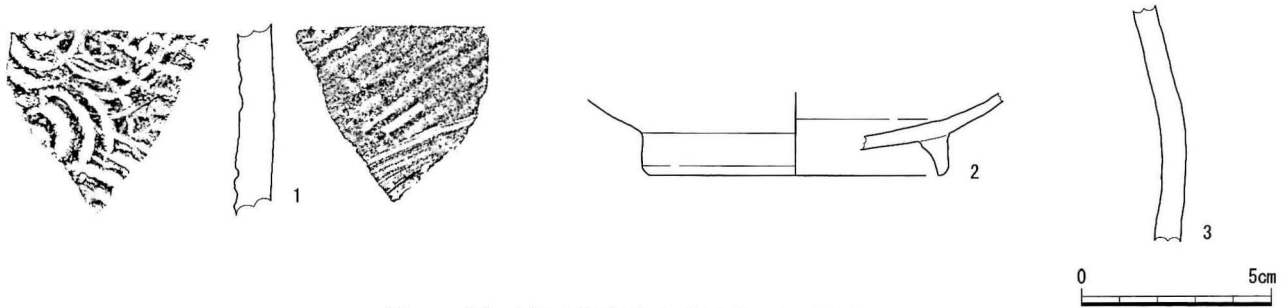
第 21 図 漆垣外遺跡位置図 (S=1/5,000)



第 2 2 図 調査地全体図 (S=1/200)



第 2 3 図 調査グリッド断面図 (S=1/40)



第24図 漆垣外遺跡出土遺物 (S=1/2)

第4表 漆垣外遺跡出土遺物観察表

番号	時代	器種	法量 (cm)	整形・調整	焼成	残量・色調	胎土・特徴	出土位置
24図1	古墳後期	須恵器甕	口径 底径 器高 — — —	内面 同心円当具痕 外面 平行叩き痕	良好	小片 内面 灰色 外面 黒色、白色	緻密、砂少量含む、中～大型甕の胴部、外面は黒色自然釉掛かり発砲して白くなる、当具痕が明瞭、6～7世紀の他地方窯産	2G3層
24図2	平安	灰釉陶器高台坏	高台径 — (7.7) —	内外面 ロクロ成形 外面 貼付高台	良好	底部小片 内外面 淡灰白色	緻密、器厚薄い、底部内面は研磨されたようになめらか、三角高台	2G3層
24図3	平安	灰釉陶器瓶壺	— — —	内面 ロクロナデ 外面 削り	良好	小片 内外面 淡白褐色 外面 淡緑～透明釉	緻密、白色粒～小石含む、胴部でやや屈曲する、外面は薄く透明釉～淡緑色釉が掛かる、東海地方窯産、中世の可能性もある	1G2層

当該地は西側の道路より約1.5m高く、逆に山側のアパート敷地より約1.8m低い。そのため、山側は切土されている可能性も想定された。当初2m×2mのグリッドを2箇所設定して、人力で掘り下げを始めたが、表土の碎石下にコンクリートやタイルなどの瓦礫が非常に固く締められて堆積しており、掘り下げに難航した。時間の都合と遺物の量が少ないことから途中から1m幅に狭めて掘り下げように変更した。

瓦礫などの造成土堆積の下は砂質褐色土に多量の石が混ざる土が検出され、やや汚いがローム土であり、土石流などによる二次堆積と推定。遺物は出土していない。この深さで住宅基礎の掘削範囲内では遺構の分布する可能性は低いことが確認されたため、以下の掘削は行わず、調査を終了した。

遺物はわずかで、造成土中から出土した(第24図)。1・2は2グリッド3層(旧表土・耕作土)出土、3は1グリッド造成土からの出土。1は須恵器甕の胴部小片。外面は平行叩き、内面は同心円文の当て具痕跡をしっかりと残す。古墳時代的な特徴であり、他地方の製品と推定。2・3は灰釉陶器。2は高台坏で底部内面は研磨されたように滑らかになっている。高台形は三角形。3は瓶または壺の胴部片。外面はロクロ使用による削り整形と上半は施釉され透明。内面はナデ整形。ほかに焼成のあまい土師器片が数点出土しており、平安時代でも新しい頃の生産と推定される。

8. 総括

調査の結果は、造成土(瓦礫埋め土)と薄い旧表土、二次堆積砂礫層が検出され、遺構分布はみられなかった。第4次調査地では黒色土堆積が2m近くあった下から敷石建物跡が検出されるなど、近接した土地でも土層堆積は大きく異なる。扇状地の形成と遺跡の形成が複雑・重層的に組み合わさっていることを認識したうえで、今後の調査に備えたい。

<引用・参考文献>

- 諏訪市教育委員会・漆垣外遺跡発掘調査団 2011『漆垣外 - 諏訪市漆垣外遺跡第4次緊急発掘調査報告書 - 』
- 諏訪市教育委員会 2005『市内遺跡試掘調査報告書(平成16年度)』

Ⅷ 大安寺遺跡（第15次）

- | | |
|-------------------------------|-------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市豊田清水 3500 | 4. 調査目的 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成 29 年 2 月 13 日～15 日 | 5. 検出遺構 なし |
| 3. 調査面積 11 m ² | 6. 出土遺物 なし |

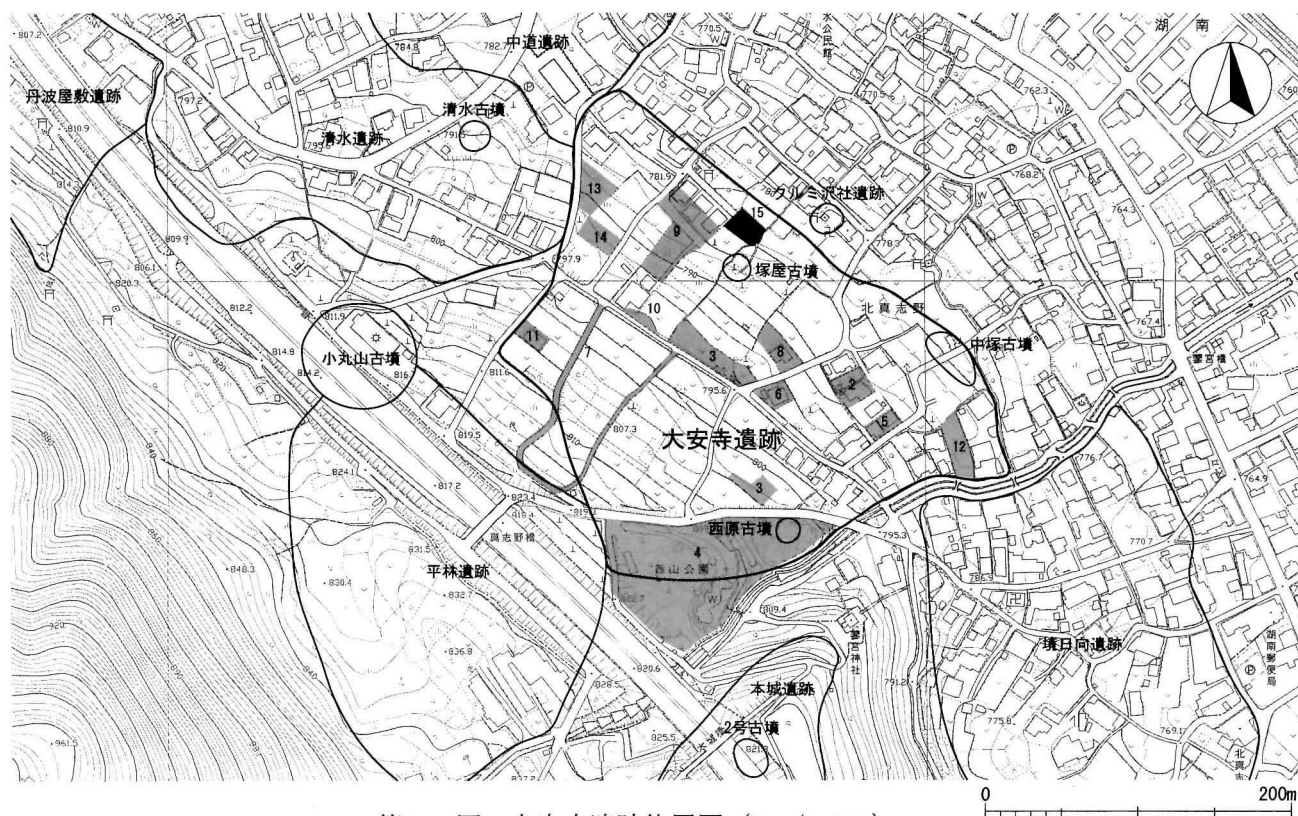
7. 遺跡概要及び調査概要

大安寺遺跡は諏訪湖南西の守屋山塊末端部に広がる集落遺跡である（第 25 図）。北東から東向きの緩斜面で、遺跡南側に流れる中ノ沢川による扇状地を形成している。遺跡の大部分は畑地であるが宅地化も進んできている。過去 14 度調査が実施され、縄文時代中期から後期、弥生時代後期の竪穴建物跡などが検出されている（諏訪市 1995）。また、横穴式石室を有する後期古墳も点在している。遺跡名の「大安寺」は、中世寺院があった伝承からきているというのが定かでない（豊田地区公民館 2011）。

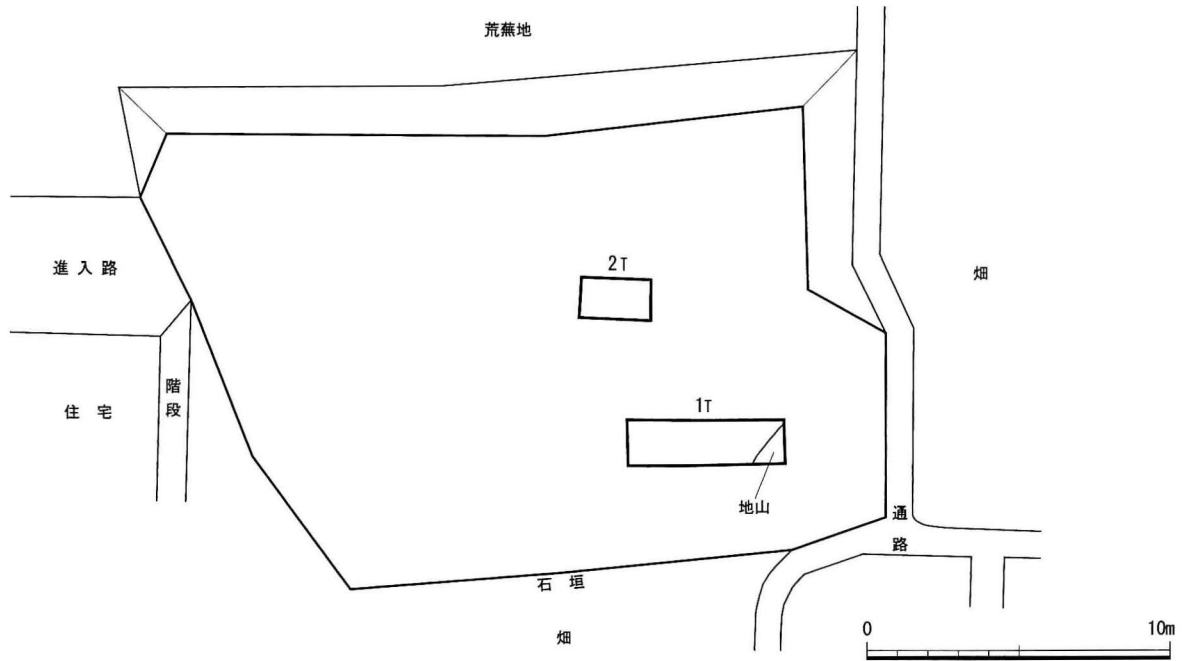
調査地は包蔵地範囲北東で第 9 次調査地の東隣接地にあたる。調査地の南（斜面上側）には塚屋古墳が所在する。横穴式石室をもつ後期古墳で、石室は昭和 4 年に発掘され、修復も行っている（諏訪市 1995）。出土遺物は銅鏡・刀・鏃・耳環・土師器高坏があったようであるが、所在は不明である。

今回は畑地に個人住宅建設を行う計画があり、事前に試掘・確認調査を実施した。対象地内に幅 1.5 m のトレンチを 2 本設定し、重機および人力により掘り下げを行った（第 26 図）。調査の結果、畑の表土は 10～20cm、その下は現代にかく乱されたとみられる堆積が広範囲に確認された（第 27 図）。

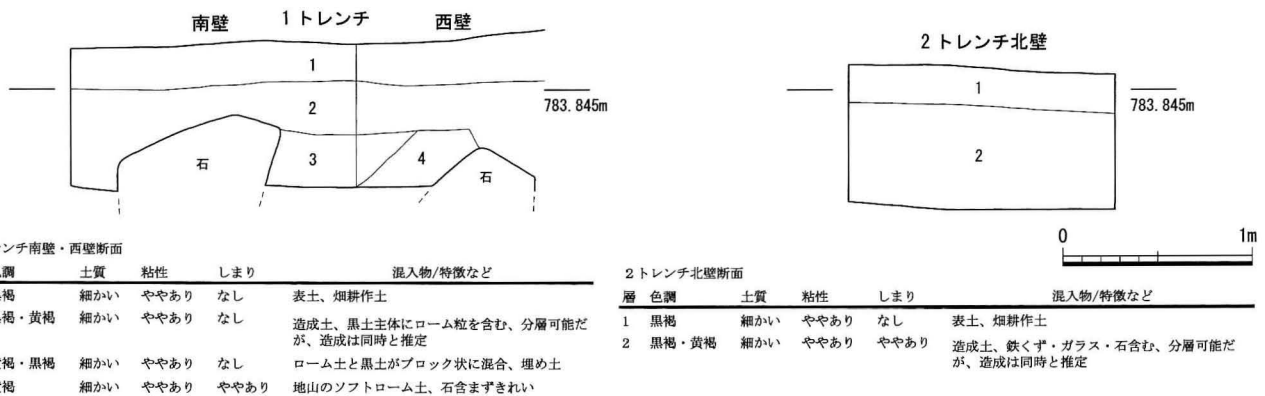
出土遺物はない。ただ、事前の現地協議の際、南端の石垣付近で土師器高坏の底部片を採集した。摩耗により器面の詳細が見えないが、その器種から古墳副葬品の可能性もありえそうなものである。



第 25 図 大安寺遺跡位置図 (S=1/5,000)



第26図 調査地全体図 (S=1/250)



第27図 調査トレンチ断面図 (S=1/40)

以上のことから、住宅建設にあたっては本調査の必要はないと判断した。

8. 総括

土地所有者によると、20年ほど前に瓦礫を埋め立てたことがあったようで、今回検出したものがそれらであろう。隣接する第9次調査では弥生時代後期の住居跡が2軒発掘されているが、位置は斜面上方であり、下るにつれて遺構分布はなくなる。調査地は扇状地の中ほどから下半に位置し、集落が形成された範囲より外側になっている可能性もありそうである。

近接する塚屋古墳は横穴式石室が露出しているが墳丘は残されていないため、墳丘規模が分かっていない。調査地とは約40mの距離で、墳丘あるいは周溝などが調査地におよぶ可能性も考えられたが、残念ながら関係するような痕跡は発見されなかった。周辺での調査機会を得た際には注視していきたい。

<参考文献>

- 諏訪市 1995『諏訪市史』上巻
- 豊田地区公民館 2011『豊田村誌』上巻

写真図版



大和遺跡遠景（東から）



調査地全景（南から）



1グリッド完掘（南から）



2グリッド完掘（南から）



2グリッド西壁（東から）



角道通り遺跡調査地全景（北から）



御頭ミシャグチ古墳推定地（南から）



1グリッド完掘（南から）



1 グリッド完掘 (北から)



2 グリッド完掘 (南から)



金子城跡調査地全景 (西から)



1 グリッド完掘 (南から)



2 グリッド完掘 (南から)



3 グリッド完掘 (南から)



温泉寺横遺跡遠景 (東から)



昭和37年頃の様子 (東から、藤森栄一撮影)



調査地全景（南西から、手前は住宅解体更地）



調査地全景（南から）



1 グリッド完掘（南から）



2 グリッド完掘（北から）



2 グリッド完掘（西から）



3 グリッド完掘（北から）



御屋敷遺跡調査地全景（南東から）



第1次調査の様子（南西から、奥の畑が今次調査地）



1 トレンチ遺構有無確認面 (北西から)



1 トレンチ サブトレンチ1 完掘 (南東から)



1 トレンチ サブトレンチ2 (南から)



1 トレンチ サブトレンチ2 (西から)



2 トレンチ遺構有無確認面 (南東から)



2 トレンチ北西端 (南東から)



2 トレンチ サブトレンチ1 (南西から)



2 トレンチ サブトレンチ2 (南西から)



2 トレンチ サブトレンチ 3 (南東から)



調査の様子 (北から、右上が第1次調査地)



漆垣外遺跡調査地全景 (南から)



調査地全景 (東から)



1 グリッド完掘 (北西から)



2 グリッド完掘 (南西から)



大安寺遺跡遠景 (南から)



調査地と塚屋古墳 (北から、中央奥の木が石室)



調査地全景（南から）



1 トレンチ完掘（南東から）



1 トレンチ完掘（北西から）



1 トレンチ南東端の地山と壁断面（北西から）



2 トレンチ完掘（南東から）



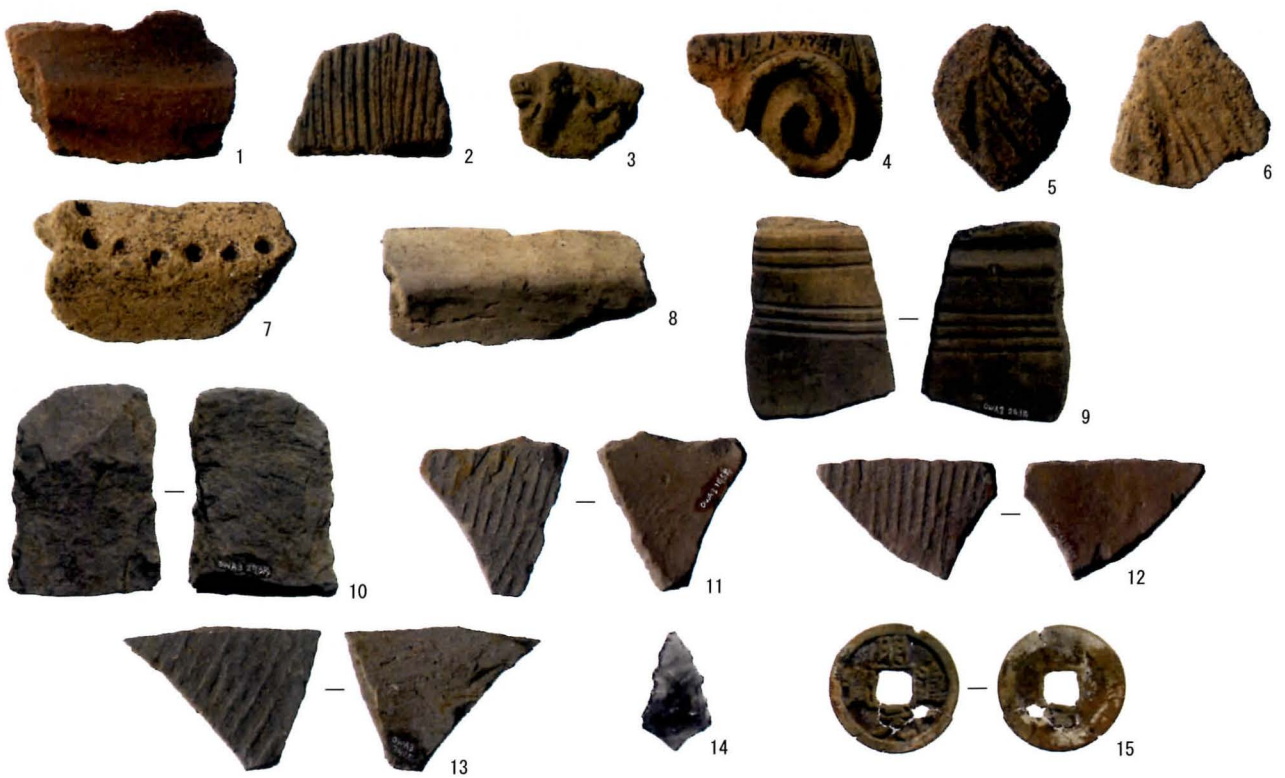
2 トレンチ完掘（北東から）



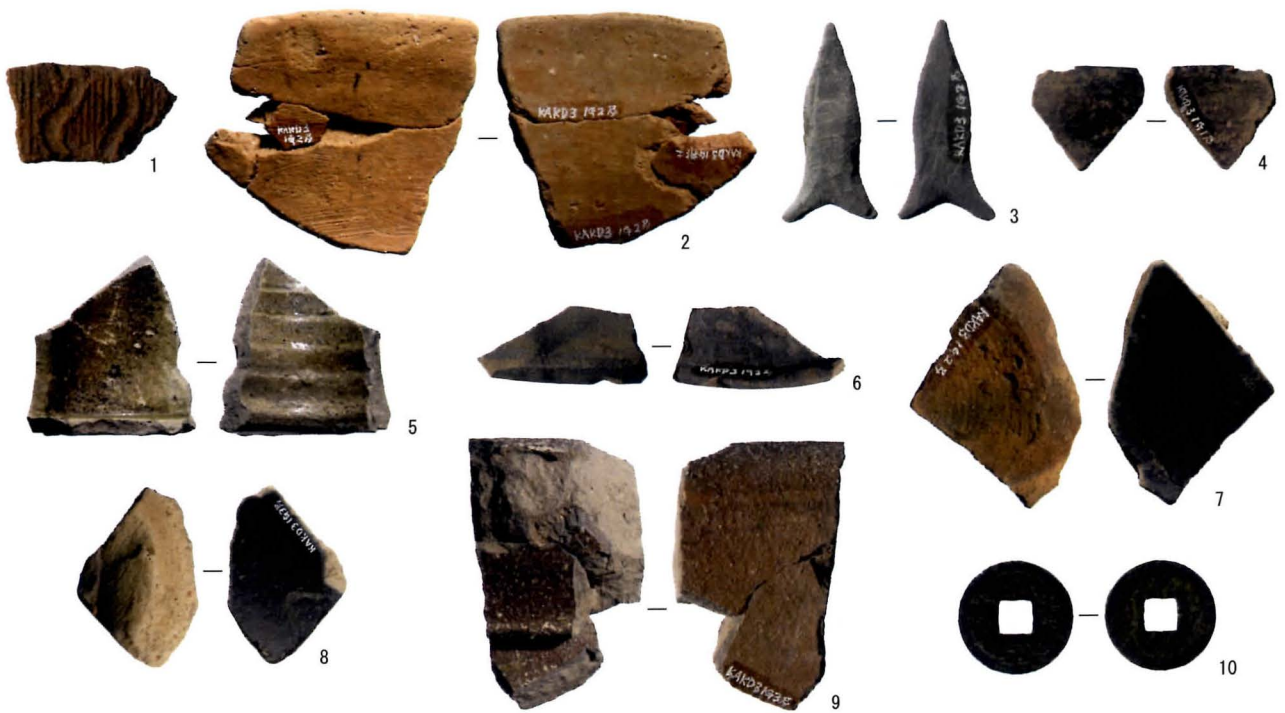
重機による埋め戻しの様子（南から）



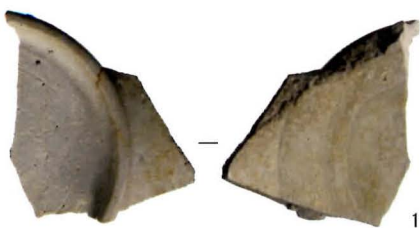
塚屋古墳の横穴式石室（北から）



大和遺跡出土遺物



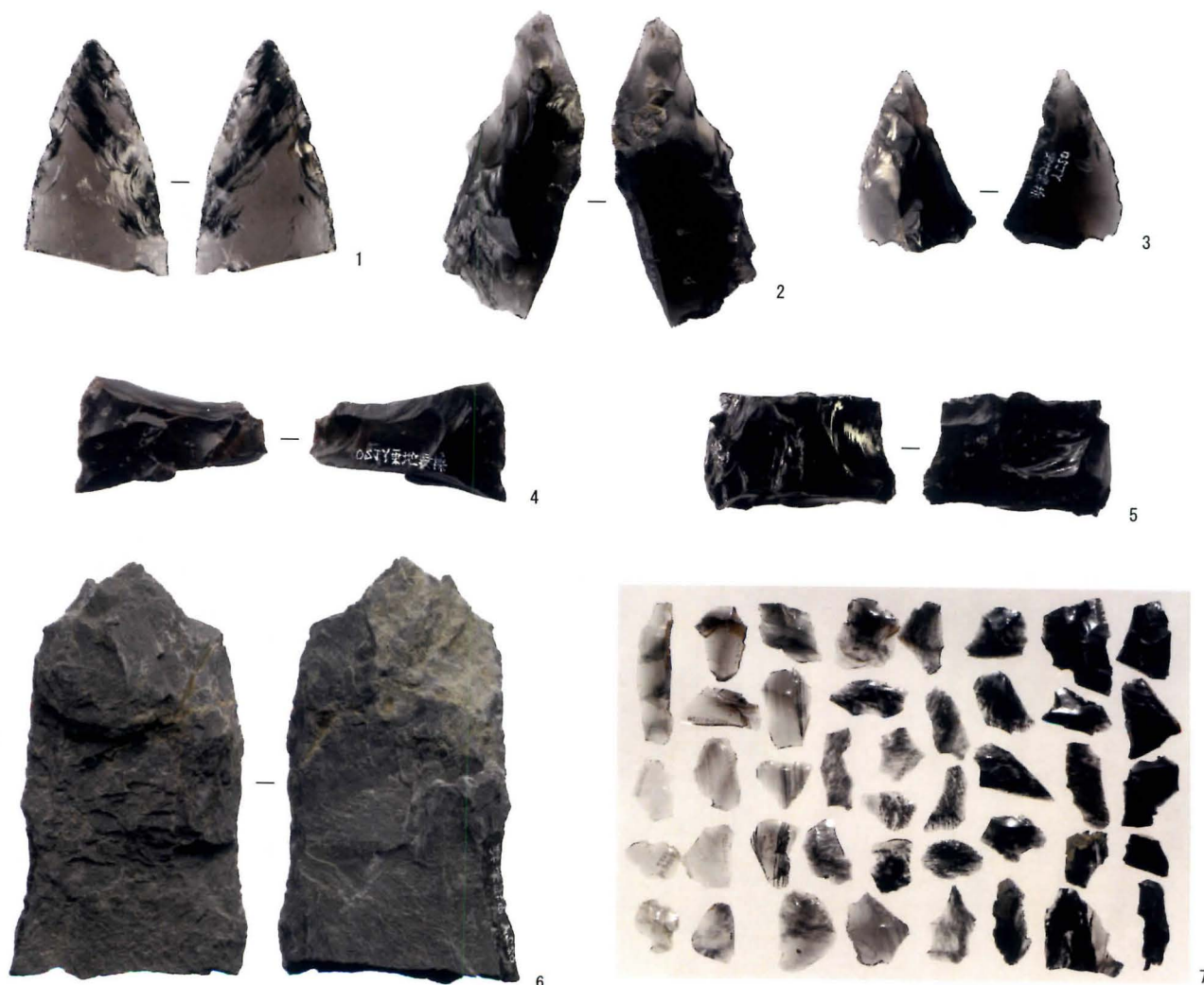
角道通り遺跡出土遺物



金子城跡採集遺物



温泉寺横遺跡採集の黒耀石製尖頭器



温泉寺横遺跡採集遺物



御屋敷遺跡出土遺物



漆垣外遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつくつちょうさほうこくしょへいせいにじゅうはちねんど
書名	市内遺跡発掘調査報告書（平成28年度）
副書名	長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	諏訪市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第77集
編著者名	児玉 利一
編集機関	諏訪市教育委員会
所在地	〒392-8511 長野県諏訪市高島1-22-30 電話0266-52-4141
発行年月日	平成29（2017）年3月27日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	。 / 〃	。 / 〃			
おわいせき	ずわしおわいちょうめ	202061	3	36° 03' 32"	138° 06' 55"	20160405 ～ 20160406	4	個人住宅建設に係る試掘・確認調査
大和遺跡	諏訪市大和一丁目11150-2							
かくどうとおりにせき	ずわししがかくどうとおりに	202061	217	36° 01' 19"	138° 08' 13"	20160707 ～ 20160708	3	個人住宅建設に係る試掘・確認調査
角道通り遺跡	諏訪市四賀角道通4433番イ他							
かねこじょうあと	ずわしなかつまぢだ	202061	359	36° 00' 59"	138° 06' 59"	20160711	6	宅地造成に係る試掘・確認調査
金子城跡	諏訪市中洲町田3771-1他							
おんせんじよこいせき	ずわしなみすなみまつ	202061	15	36° 02' 58"	138° 07' 09"	20160912 ～ 20160916	5	駐車場建設に係る試掘・確認調査
温泉寺横遺跡	諏訪市上諏訪並松10682-1他							
おやしきいせき	ずわしこなみなかむらざわどおり	202061	327A	36° 00' 30"	138° 05' 41"	20161004 ～ 20161007	42	土地売買に係る試掘・確認調査
御屋敷遺跡	諏訪市湖南中村沢通4826番1							
うるしがいいいせき	ずわしおわにちょうめ	202061	6	36° 03' 28"	138° 06' 59"	20161213 ～ 20161215	8	個人住宅建設に係る試掘・確認調査
漆垣外遺跡	諏訪市大和二丁目11067番6							
だいあんじいせき	ずわしとよだしみず	202061	317	36° 01' 03"	138° 05' 17"	20170213 ～ 20170215	11	個人住宅建設に係る試掘・確認調査
大安寺遺跡	諏訪市豊田清水3500							

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大和遺跡	散布地	縄文・古墳・平安		縄文土器・石器・須恵器・銭貨	
角道通り遺跡	散布地・墳墓	縄文～平安		須恵器・土師器・石鏃・銭貨	
金子城跡	城館	中世・近世・近代		陶器・磁器	
温泉寺横遺跡	散布地	旧石器・縄文		黒耀石製石器	
御屋敷遺跡	集落	縄文・弥生・平安		縄文土器・磨製石斧・須恵器・陶器・磁器・銭貨	
漆垣外遺跡	集落	縄文・平安		須恵器・灰釉陶器	
大安寺遺跡	集落	縄文～近世			

要約	<ul style="list-style-type: none"> ・大和遺跡 第3次:遺構なし。 ・角道通り遺跡 第3次:遺構なし。 ・金子城跡 第12次:遺構なし。 ・温泉寺横遺跡 第1次:遺構なし、黒耀石剥片出土。尖頭器が表面採集される。 ・御屋敷遺跡 第2次:遺構なし、土器片がわずかに出土。 ・漆垣外遺跡 第6次:遺構なし、平安時代の土師器・灰釉陶器が数点出土。 ・大安寺遺跡 第15次:遺構・遺物なし。
----	---

市内遺跡発掘調査報告書（平成28年度）

－長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書－

平成29年3月27日

編集・発行 諏訪市教育委員会
長野県諏訪市高島1-22-30
印刷 有限会社増澤印刷所